
Distant eyes

山田サンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i s t a n t e y e s

【Nコード】

N 5 8 7 8 I

【作者名】

山田サンタ

【あらすじ】

商社を辞めセミリタイアしたような生活を送る神田晋一郎。行きつけのジャズクラブであったOL上田香との奇妙で切ない生活を描く長編。

CrossRoad(前書き)

尚、各サブタイトルはその項のイメージする曲名を付けてみました。毎回あとがきにその演奏者とyoutubの参考URLが貼り付けてあります。

名曲ばかりですので是非聴いてみて下さいね。

> i3021—511 <

その日の午後も、私は仕事を早めに切り上げいつものライブハウスに向かった。

こんな生活を送るようになってもう7年だろうか。

仕事は以前勤めていた商社と違い、いたって気楽なものだ。

インターネットを使った通信販売のようなもので、趣味のブログから毎日注文が入り

発送するだけである。とはいっても月に50万円ほどの利益が出るお陰で商社時代のお陰で

貯金を切り崩さなくても充分生活ができた。そもそも週に2回のライブハウス通いを

除いてこれといった贅沢はしていない。

この「ライブ」というのは若者たちがヘッドバンキングをするような店ではなく

それこそ老舗といわれるジャズクラブだ。日替わりのアーティスト達が演奏し

そこそこの食事も提供している。店内はそれほどハイセンスというわけでもないが

照明と家具によって落ち着いた雰囲気を出していた。

もちろん禁煙などという野暮なことも言わない。

もっとも私自身タバコを吸ったことはないのだが、煙がスポットライトに漂うさまは

音楽には欠かせない要素のひとつであると考えている。

ライブの前に簡単な食事を行きつけの串カツ屋で済ませた後、書店に立ち寄った。

演奏開始は大体8時前である。いくら店が開いているからといって7時そこそこに入っては暇を持て余してしまう。それまでの時間つぶしだ。商社時代の癖が抜けず経済情報誌のコーナーをブラブラしながら気になった表紙の手に取る。

「清水さん？」聞き覚えのある声に振り向くと商社時代の後輩だった田中が懐かしそうな顔をして立っていた。

「おお。田中じゃないか！久しぶり」

「清水さんひどいですよ、連絡先も教えてくれないんだから。」

「悪い、悪い。あの後半年ほどベトナムに居たんだ。今と違って携帯も

通じなかったし。」

「そうなんです。丁度よかった携帯教えてくださいよう……」

「なんだかんだと30分近く立ち話をしていつものジャズクラブに向かった。」

7時45分。すでにライブは始まっていた。

「お一人様ですか？」

最近入ったばかりの店員が人懐っこい笑顔で話しかけてくる。

軽く頷きながら入り口に一番近いテーブルに腰を下ろすと、演奏者がチラッとこつちを

見て微笑みかけた。今夜はお気に入りのバンドである。

何度も聴きに来るようになって自然にバンドメンバーとも親しくなり今ではちよつとした友人のような存在だ。

それにしても相変わらず胸のすくようなフレーズである。

ジャズのことをあまり理解しているわけではないが、このバンドは毎回違う景色を

見させてくれる。

今日の演奏は草原を感じさせてくれていた。

「こんばんは。ここいいですか？」一人の女性が同じテーブルに座ってきた。

「あっ、どうぞ・・・」そう言いながら彼女を見上げた。結構美人である。

今夜の入りは半分ほどで、あちらこちらに空席も目立つ。

わざわざここに座るといふ事は、多分メンバーの知り合いか何かであるろう。

演奏が終わると、大体私のテーブルで最近あったことなどをメンバーたちと

話したりする。そんな事を知っているのだろう。

ワンステージ目が終わりギターのジェイがやって来た。

「あれ？ どうしたの今夜はデートかなんか？」ちよっとからかう様に

話しかけてきた。

「いやいや、ここで一緒にいただけで、初めてお会いするんですよ。メンバーさんのお知り合いの方じゃないかな？」

そう言いながら彼女のほうを見た。

「違うんです。時々・・・年に2〜3回ここに来るんですけど、いつもいらつしやるからきつと常連さんなんだと思って。」

「ごめんなさいお邪魔だったかしら？」

「あらら、カンちゃんモテるじゃん」

ジェイがさらに冷やかすように言った。

「ジェイさん止めてくださいよ。彼女どうしていいのか分からなくなってますよ」

そう言いながら 彼女に笑いかけた。

「じゃあご紹介を。こちら神田晋一郎さん通称カンちゃん。ここの主みたいなひとです。」

ジェイが笑いながら紹介し始めた。

「あの・・・私は香・・・上田香です」少しはにかみながら彼女は

答えた。

「へー、かわいい名前だね。雰囲気からだど・・・うーん、白鳥玲子さんって感じかな？」

ジエイがいつもの癖で笑いを取ろうとして、ちょっとスベってるのが可笑しかった。

「ジャズは好きなの？」私の問いかけに首を傾げにつきり微笑んだ。「どう言ってるのいいの・・・よく分かってないんです。でも雰囲気が好きかも・・・」

香はこの近くの旅行会社に勤めるOLで、この店の前は毎日通っているらしい。

数年前、一度半年ほど付き合っていた上司に連れられ観に来てから、会社で嫌な事があつたりすると、一人で店に来ているらしかった。

もともと、女子大時代はディスコなんかにはまったく縁のない内向的な性格だったが旅行会社でカウンター営業するようになって、少しは飲みに出たりするようになった。

だが飲みに行くと言っても、同僚のOL達とそんなに遅くならない程度に付き合うその程度である。

だから仕事でムシャクシャしたからといって、ぐでんぐでんになる様な飲み方はしていない。今夜も2ステージを観終えたら1LDKのマンションに帰るつもりであった。

ところが偶然同席したメンバーたちとの楽しい会話で、すっかり出来上がってしまったこのまま帰ってしまうのがもったいない様な気がしていた。

明日仕事は休みである。土日が忙しいので、大体水曜か木曜に休みを取っている。

今日は火曜日だ。普通のサラリーマンは翌日を考え終電に間に合う

よう店を出るだろう。

その後店内に残るのは、水商売関係の客かバンドのメンバーだったりする。

この日も店には数組の客と、このテーブルだけが終演後も盛り上がっていた。

「カンさんは 明日早くないんですか？」香が笑いながら話しかけてきた。

「いや・失業中みたいなものでして、気楽なもんですよ」

「そうなんですか？ そんな風に見えない」

「どうやら本気で受け取ったようである。」

「カンちゃんは 自営業なんですよ。お気楽ご気楽な」

ベースのマサさんがフオローしてくれた。40代後半のナイスガイである。

「自営業なんですか？お休みとかは決まってるんですか？」

「いや、インターネット通販なんで毎日が休みみたいな・・・」

「よかった。じゃあもつとゆっくり出来るんですね？」

・・・これにはちよつと言葉を失った。

この店は確かに2時ごろまで開いてはいるが、バンドのメンバーは機材を片付けると

それぞれ帰って行く。いくら遅くても12時半頃には全員居なくなるだろう。

このままでは彼女と二人きりだ。そうなれば次回のライブは、この上田香とのそれからを

常連客全員に言い訳しなければならぬ。

ここは早めに帰ったほうが身のためである。

といて、女性を一人置いていくというものもなんだか気まずい。

彼女が先に帰るといのがベストなのだが・・・そんな事を考えているとジェイが余計な気を使って「それじゃあ僕たちはこれで失礼します。後はお若いお二人にまかせて・・・」と、分かったような

分からないような言葉を残して店を出て行った。

チラツと時計を見た。

12時10分である。内心（おいおい、変な気を廻しやがって・・・

）

という気持ちと、最近色恋話から無縁だったんだからここは楽しく、
などという考えが

浮かんでは消えた。

「ねえ、どこか別のところで飲みましようよ。この近くならまだや
ってる店いっぱい

ありますよね？」

根性なしで優柔不断を見透かしたように彼女が言った。

「そうだね、うん。いい店がある。行ってみましようか」

そう言っただけで伝票をもって席を立った。

CrossRoad (後書光)

CrossRoad

Cream Eric Clapton

http://www.youtube.com/watch?
v=YdWVI4B30Y

s o w h a t !

> i 3 0 6 0 — 5 1 1 <

店を出た二人は神田の知っているバーに向かった。5分ほどの距離である。

チェックするときに女性店員がウインクしたのが妙に気になった。まあ、一応男であるから下心がまったく無いと言えば嘘になるが、さすがに

常連で通っているこの店で居心地の悪い思いはしたくない。

やはりマズかった、などと考えているともう店の前だ。

とりあえず成るようになれである。

「あっ、いらっしやいませ？ 神田さん、お珍しい女性連れなんてやれやれ、ここでも同じ対応である。普段仙人のような生活をしていると

こういう時、対処のしように困る。とりあえずカウンターに案内されると

中に居た3人が一斉に視線を向ける。

「神田さんここも常連なんですね。すごい」何も知らずか楽しげにワイングラスを持ち上げカンパニー、などと言っている。しかしなんだか居心地

が悪い。いつもの店に、いつものバーボン。何が違う？ そのとき理由が分かった。

上田香の座ってる場所である。彼女を案内されるまま、自分の右側の席に座らせて

しまっていた。普段女性と一緒に飲んだりするときは必ず自分が右側に座る。

こうしないと始まらないのである。

始まらない、というのは主導権が取れないということ、今夜は正にそれである。

そしてその不安定な状態で彼女の質問攻めが始まった。

「神田さんって独身だつてさっき言っていましたよね？結婚したことはないんですか？」

「てゆうかぁー、付き合ってる人とか居ないんですかぁー」
言葉の語尾がさっきまでとまったく違う。完璧に酔っているのだから。

多分明日になればほとんど忘れているはずである。適当に話を合わせておいた

ほうが良さそうだ。

「一度結婚したんだけど・・・だめになつてね。それからは独身だな。女の子と付き合う事はあるけど、真剣にどうこうというのは全然ないね」

「そうなんですかぁ、寂しくないんですかぁ？一人ぼっちで」

「いやいや、別に一人ぼっちってわけじゃないよ。友達なら大勢居るし・・・」

「わかった。セフレとか居るんだぁー。大人だもんね」そう言うと赤ワインの

グラスを一気に飲み干した。いやはやこれは参ったである。

カウンターの中でマスターが笑いをこらえ切れずに下を向いてしまった。

自分では結構クールに装って飲みに来ている店である。とんでもないのを連れて

来てしまった。そう思って横に目をやると、上田香はカウンターに倒れこみ軽い

寝息を立てていた。

「神田さん大丈夫ですか？彼女。　だいぶ酔っ払ってるみたいですが・・・」

「それほど飲んでないと思っただけで、参ったな。マスター車呼んでくれる？」

最悪である。暫くしてタクシーが来た。

マスターと一緒に彼女をタクシーまで運んだ。

「お客さん行き先は？」 不安げに運転手が聞いてきた。

「本人に直接聞いてもらえないかな？ そのうち起きるだろうから。これで足りると思うから」

ポケットにあつた5千円札を運転手に渡すと、寝ていた彼女が突然腕を

引っ張ってきた。「きつ、気持ち悪い・・・」あわてて彼女を車から降ろし

道路わきの街路樹の茂みに座らせ背中をさすってやった。

少し落ち着いたところで先ほどの運転手が、出来れば一緒について来て

もらえないかと哀願してきた。やむ無く承諾し一緒に上田香の自宅へ向かった。

住所はそれほど遠くない。ここからだとも15分位だろうか？

とりあえず送り届けたら今夜はサウナにでも泊まるう。そう考えていた。

「香さん、着きましたよ。自分の家ですよ。ほら、起きて・・・」

「あつ、うん・・・うちだ。神田さん、あがつていくでしょー」

「いや、僕はここで失礼するよ。降りてくれるかな？」

「なーんだ。じゃあ降りない。ここで寝るう」

やれやれ、厄介な事になったなものだ。運転手も迷惑そうである。

「わかった、じゃあ一緒に入ろう。ほらこつちだ」

「運転手さん悪かったね。さっきの取つといてもらえばいいから」

「いいんですか？ すいません。ありがとうございます」

かなり多目のチップで気を良くした運転手は、深々と頭を下げ車を出した。

「部屋は何号室なの？」 エントランスはオートロックのようであるがドアは開いたままであった。

「407号室ですう。4階の・・・」

「もう遅いんだから大きな声出しちゃダメだよ」ふらつく彼女を

抱きかかえるようにエレベータに乗った。

部屋に入ると意外に綺麗に片付いていることに驚いた。確かに初めて見た

時の印象は清楚、という言葉がぴったりだったから、酒さえ入らなければ

この部屋の主が、いまトイレで派手にリバーズしている彼女だとしても

何ら不思議ではない、と自分に言い聞かせた。

「わたし・・・シャワーしてくる」そう言うといきなりその場で服を

脱ぎ始めた。あまりに唐突な出来事にポカンとしていると、裸のままフラフラとバスルームに消えていった。

「どうなってるんだ？・・・無防備にも程があるだろ・・・」しっかりと見ていないが、なかなかのプロポーションである。

どちらか酒が入っているし、この際据え膳食わねば、の言葉に従ってなどと

自制心の箍たがを外す言い訳を考えていると、バスルームからドーンという大きな

音が聞こえてきた。

「香ちゃん！大丈夫なの？　大きな音がしたけど。おい、聞こえないのか？」

返事が無い。何度かノックしたが中は無音である。

出来るだけ中を見ないようにバスルームのドアを開けた。

予想通り、空のバスタブに仰向けの香が気を失っていた。

s o w h a t ! (後書き)

S o w h a t !

M i l e s D a v i s a n d J o h n C o i t r a n e

マイルス・デイビス ジョン・コルトレーン

<http://www.youtube.com/watch?>

V = P 4 T b r i d g e B O E

D i a m o n d D u s t

「まいったな・・・」バスルームから全裸の上田香を担ぎ出し、彼女のベッドへ運んだ。

まだ身体が濡れていたのでもちらもベタベタである。

「人の服をバスタオル代わりに使いやがって・・・」見たところ怪我はなさそうである。

目を覚ました時真つ裸というのも妙な疑いをかけられそうなので、頭を拭いてやり

掛け布団をかけてやった。

「さてと・・・」このまま帰ったほうが良さそうである。多分どうやって帰った

などという事は記憶に無いだろうし、大体、朝までここに居て「あなた誰？」なんて

とんでもない話になるのはよくあるパターンだ。

濡れた服が気になるが、長居は無用だとソファから立ち上がった時、妙なものが

目に入った。

香の部屋に入ってからハプニング続きという事もあり、中の様子を見るとちゃんと見ていなかったのが当然なのだが・・・

「このCD・・・なんで彼女が？」それは10年ほど前、まだバンドをやっていた

頃に自主制作で刷った何枚かのCDである。

その頃のメンバーはそれぞれプロ活動をしており、音楽から離れたのは自分だけであった。今でも趣味的にギターを弾いたりはあるが、人前で演奏する事は皆無である。

例外的に言えば、女性を口説くときのアイテムとしては若干現役かもしれないが・・・ここで少し気になる事ができてしまった。

ひょっとして彼女は私のことを知ってたのでは

無いのだろうか？　それであの店で……

イヤイヤそれは無い。彼女はどう見たって25〜6、いやもつと若いかもしれない。

10年前ならまだ子供だ、そんな子がこんなCDを買うのも変である。

「気になる……」なぜか、そのCDがここにある理由を聞かなければ帰ってはいけない

ような気がしてきた。そう思うとゆっくり部屋を観察する気になってきた。

間取りは1LDKだろうか。しゃれた白いドアを開けるとフロアリングの廊下があり

トイレ、バスルームとウォルナットのドアが続く。そして同じ色の引き戸を開けると

ダイニングがある。6帖程だろうか？　白色の丸いテーブルに赤い椅子が二つ。

ファミリー用の冷蔵庫に白い食器棚。かなりインテリアには凝っているようである。

そしてこのリビング兼ベッドルームというところか。テレビは無いようである。

麻色のソファーに白いサイドテーブル、壁には作り付けのようなウォルナットの

収納庫。そこにソニー製のミニコンポとPCなどが綺麗に配置してある。

ディスプレイされているCDを見ると、それほど枚数は無くクラシックが多いようだ。

本を見ると旅行業務についての参考書が数冊、あとは直木賞作家の何冊か……

部屋を見る限り真面目そうな子である。

「普段あんなにお酒を飲まないんだろうな」そう思うとさっきまでは少し頭にきていた

自分が少し大人気ないように思えてきた。

「あのー・・・神田さん？」後ろから声がした。

「香ちゃん気づいた？ おはよう」香は自分が裸でベッドに居る事に気づいたようである。

「わたし・・・何でここに・・・」掛け布団を首まで引っ張りながら聞いてきた。

「君、お風呂でひっくり返ってたんだよ。で、そこまで運んだ・・・以上！」

「そうだったんですかあ・・・ご迷惑おかけしました」

「じゃあ、僕はこれで帰るから。一つだけ聞いてもいいかな？ ここにある

CD・・・何で持ってるの？」極力冷静に聞いてみた。

「あつ、それ母のなんです・・・母と言っても再婚してうちに来た義母なんですけど・・・」

「再婚して？ お母さん名前は何て言うの？」嫌な予感がした。

「裕子です。なんでそんな事を？ 神田さん、お知り合いなんですか？」

話を聞いていて一瞬気を失いそうになった・・・別れた妻である。

「いや、こんな珍しいCDを何故持ってたのか気になってね・・・
兎に角今夜は

これで帰ることにするよ。じゃあ僕が出たら鍵閉めるように。いいね」

そういつて部屋を出ようとすると香が大声で言った。

「お願い！帰らないで！」

掛け布団で胸から下を隠した香がすぐ後ろに立っていた。

DiamondDust(後書き)

DiamondDust

Jeff Beck ジェフ・ベック

<http://www.youtube.com/watch?v=a3Nh2lHWrik>

Double Trouble

「お願いだから一緒に居て！」その縋るような態度に少し驚いて尋ねた。

「何かあったのかい？話をする位はいいけど……その前に服を着なさい」

そう言つて、リビングとダイニングの間の引き戸を閉めた。赤い樹脂製の椅子に

腰を下ろし話を整理してみた。別れた妻が再婚した先の娘からすると……

ちよつと待てよ……二人の間に子供は居なかつたが、もし居たならば

彼女とは兄妹だったかもしれない……その前に彼女と……その……

そういつた関係になつたとして、結婚なんて場合は、別れた妻が母親？

いかんいかん。絶対にあつてはいけないことだ。アホすぎる。

それにしても何を考へてるんだ？ ああ、自分が情けない……

「おまたせ」パジャマのような部屋着を着た香が引き戸を開け入ってきた。

「神田さん、色々ご迷惑かけました。あんなに酔つ払うなんて初めてで……」

あの、何か飲みます？ ビールとか……」すっかり酔いが醒めたのだろうか

少し青い顔で気まずそうにテーブルの前に座つた。

「そうだな、じゃあコーヒーか何かもらえるかな？ 君も暖かいものを

飲んだほうがいいと思うよ」髪の毛はドライヤーで整えたのだろう。ストレートの髪を後ろで留めてあつた。

香はインスタントコーヒーのパックを2つ用意し、ポットからお湯を注いでいた。

手つきは上品で無駄が無い。仕事柄そういった訓練は受けているのだろうか？

目の前に静かに出されたティーカップはウエッジウッドだった。

「ごめんなさいね、コーヒーカップが無いの。お砂糖とミルクは？」

「いやいいんだ、何も入れない。ありがとう・・・ところで香ちゃんいくつなの？」

女性に年齢を聞くのは野暮かもしれないけど・・・」

ティーカップに砂糖を入れる仕草がなかなか優雅だ。1杯・・・2杯・

・3杯・・・4杯？

「いったい何杯入れる気だ？ 病気がコイツ？ と、突っ込みたくなつたが、ここは冷静を

装って静かにコーヒーを飲んだ。

「26です。あつ、でも来月誕生日だからもうすぐ27歳になります。神田さんは

おいくつなんですか？」素で見る彼女の顔はもう少し若いのではないか、と思うほど

張りが合った。バスルームから運んだ際もそう感じていた。それを思い出したとたん

香を直視する事ができず、シンクの方に目をやりながら答えた。

「43歳。君のお父さんに近いんじゃないかな？」正直実際そんな気がした。別れた

妻は2歳年下である。離婚して暫くして再婚したなら7～8年前か？だとすれば

香が大学時代であろう。父親は44～45という事もありうる。

「父は53歳ですが今年亡くなりました。肝臓癌でした」

「そうなんだ・・・知らずに変な事言ってしまうて・・・ゴメンね」53歳か、そうすると

裕子のヤツ、随分年上と再婚したんだ。

正直アイツの趣味は最後まで解らなかったが……

携帯の画面は確かアイドル歌手だった。それでいて音大出身のピアニスト教師である。

まあ今となつては懐かしい思い出なのだが……

「わたし、あまりお父さんとは一緒に居なかったの。海外転勤が多かったみたいで

小さい頃からほとんど母と二人で暮らしていたから。でもわたしが高校生の頃、母が倒れて

父がやっと戻してもらえたんです、本社に。でもすぐ母は亡くなったの」

その後彼女は父親と一緒に住んでいたが、何年も生活を共にしていなかったせいか

息苦しい家庭だったらしい。それで大学を地方都市にして一人暮らしを始めた。

卒業も近い頃、父から再婚の話聞いたがそれほど反発はなかったと言う。

ただ、ほとんど実家には戻らずすぐにアパートを借りて一人暮らしを始めた。

そして一昨年中古のこのマンションを買って住みだしたらしい。

「中古でも結構大変だったでしょ？頑張ったんだね」

「違うの、実はほとんど父が出してくれたの。わたしが出したのは食器や

家具類の一部だけ。一度父を招待したかったんだけど……入院生活が

長くて……そのまま死んじゃったから……」見る見る目が充血していくのが

わかった。

「そうか……好きだったんだねお父さんの事」彼女はコクツと頷きタオルで

顔を隠した。いい子じゃないか。いまどき珍しい素直な子だ。

商社時代も社内のOLや接待で使うクラブの女の子を見てきたが、皆強かである。

男なんかよりよっぽど社会に順応している、と感心とも呆れるとも思える感情を抱いていた。

「ちよつと落ち着いてきたかな？ このまま朝までというのはマズイでしょ？」

そろそろ帰ってもいいかな？」そういうと香は急に怒った顔で答えた。

「神田さんわたしの事そんなに嫌いなんですか？ わたしが迷惑かけたから？」

「そんなことないよ。香ちゃん一人暮らしだし、こんなオッサンが朝まで部屋に

居たりしちゃマズイでしょ？ ほら、近所の人とか友達とか・・・ね？」

そう言ってる途中彼女が急に笑いだした。あっけに取られて見ると「うそ。怒ってないし、神田さんが私のことを嫌いだなんて思っていない。

帰るなんて言うから・・・居て欲しいの」そういうとスツと立ち上がって

こちらに近づいてきた。そして私の頭を包み込むように抱きしめてきた。

顔が彼女の丁度胸のふくらみの辺りに、私の腕は自然に彼女の腰に廻っていた。

「自制心・・・」ただ頭の中で念じるように呟っていた。

Double Trouble (後書式)

Double Trouble

Stevie Ray Vaughan Scittle Bu

ttin' 曲名

http://www.youtube.com/watch

?v=JHEVIWpX2XM

香の身体が小さく震えているのがわかった。

「どうしたの？」見上げると涙を流していた。

「ごめんなさい。ちよつと寂しかっただけ・・・もつすこし

こうしててもいいかな？」そういうと腕の力を更に加えてきた。

思いつきり彼女の胸に顔を食い込ませた状態でじつとしているだけである。

さすがにどう対応すればよいのやら・・・

彼女は別れた妻の娘である。もちろん再婚相手の娘であるから関係ないと

いえばそうなのだが、ここはやはり大人である。軽率な行動は良くない。

しかしこの状況で自制心など長くはもたない。ここはいつそ君の義母の

元旦那とはつきり言うべきだろう。どうした？ 何故言わない？

もう少しこの甘い香で気分が満たされてからでもいいじゃないか。

そんな感情が声を出すのを躊躇させていた。

「ありがとう、神田さんって紳士なんですネ。何もしないなんて」

ちよつと困った質問だった。理由を説明したなら何と云うだろう？

まあ何れわかる事だろうし今説明しなくても・・・

そんな考えがまた頭をもたげてきた。

いや、きつとまずい事になる、言ってしまうおう。そう決心し彼女事情を

話す事にした。

「香ちゃんさつきCDの話したでしょ。あのCD実はボクのバンドの演奏なんだ・・・そんなに作らなかつたから気になって聞いたんだよ。」

そしたら君のお母さんのだって。そのお母さんというのは・・・

別れた妻なんだ。黙っていてゴメン。だから・・・」

そこまで言うのと彼女が唇を合わせてきた、突然の事だった。

「何をするんだ？ 今説明したじゃないか？ まだ酔ってるの？」

「だって・・・神田さんのこと好きになっちゃたんだもん。だめ？」

返事に困った。もちろん彼女の事は嫌いではないし、いい子だと思う。

しかしややこし過ぎる。大人はこういった罫？には落ちない。

そう、今までの人生経験が選択肢を自動的に安全なほうだけ照らし
てくれる。

間違はなくそつちの暗いほうは先が迷路だ。

「だめだよ。君の気持ちはすごく嬉しいけど・・・ゴメン」

暫く香は黙ってこつちを見ていた。そしてやっと諦めたのか少し寂
しげに

微笑みながら小さな声で言った。

「わかった。好きになってくれなくてもいいから時々会いたい。そ
れならいい？」

「もちろん。週2回はあの店に居るから・・・会えるじゃない」

少し冷たいようだがこうでも言わないと諦めてくれそうに無い気が
した。

「あのCD聴いていい？」突然話題を変えてきた。顔を見ると少し
泣いている

ようだ。それを隠そうとするしぐさが愛らしい。かわいそうな事を
言ってしまった。

少し後悔しながらミニコンポにCDをセットしている香を見つめて
いた。

Masquerade (後書き)

Masquerade

George Benson ジョージ・ベンソン演奏

<http://www.youtube.com/watch?>

[v=RPEfAV1T5b0&feature=fvw](http://www.youtube.com/watch?v=RPEfAV1T5b0&feature=fvw)

temptation

懐かしいメロディが流れてきた。作成当時以来ほとんど聴いていない。

1曲目のイントロはドラムス・ジュンのリズムからだ。8ビートで演奏している。

ほとんどジャズ系だから4ビートなのだが、やはりオープニングは軽快にしようと

この曲を選んだ。「Oil Lighter」 作曲は知り合いのギタリストだ。

実はこのCDの一曲に別れた妻も参加していた。元々音大卒でピアノ講師だが

ジャズのリズムが苦手なのと、アドリブが出来ないという理由からバンドのメンバー

にはならなかった。だが彼女のオリジナル曲が気に入り少しアレンジして演奏した。

5曲目の「夜桜」がそれだ。

「いつごろの録音なんですか?」CDのジャケットを見ながら香が言った。

「そうだな、10年になるかな。懐かしい」

「まだこのCDあんまり聴いて無いんです。この曲好き・・・Oil Lighter

神田さん よかったらソファに座ってください」そう言って二人掛けのソファを指した。

「大丈夫ですよ。もう襲ったりしないから」そう言うと少し顔を赤らめながら笑った。

二人は静かに演奏を聴いていた。5曲目に入ったところで香が口を開いた。

「この「夜桜」というのは裕子さんの演奏なんですね。作曲もなん

だ・・・

この頃はまだ一緒に住んでたんでしょ？」

もちろん一緒に住んでいたが既に家庭内別居に近かったはずであった。

当時は仕事で中国への出張が頻繁にあり、月に半分ほどしか家には居なかった。

にもかかわらず自宅に戻っても妻の仕事がピアノ講師だったこともあり

車で1時間ほどのレッスンスタジオで生徒を教え、彼女が自宅にもどるのは

9時過ぎ、遅い時は10時を廻ることもしばしばだった。

こうなると帰ってきてても疲れているせいか夫婦の生活はほとんど無かった。

私自身彼女を求める事を自制するようになり、多分この事が原因で別れる事になった

のでは無いかと今になって思う事がある。

「一緒に住んでいたよ。この演奏の頃は何とかやり直せないか模索してた頃かなー」

「今でも裕子さんの事 好きなんですか？」香りが寂しそうに言った。

「もちろん好きだよ。でも会ってないし会いたいとも思わないんだ。要するに・・・」

一番好きだった頃の彼女の事意外は忘れちゃってるだけなのかもしれない。

だから好きって言えるのかな？」

自分でも良くわからない感情なのだが、何が原因で別れたのかも思いつい出せない。

だからと言ってやり直せるとも思えない。誰かが言っていたが男の女性に対する

記憶方法は（名前をつけて保存）という感じなのだろうか？

「裕子さん素敵なお友達ですよね。お母さんとは呼べなかつたけど、いいお友達だし」

大切な相談相手でもあるの。今でも好きなんで、やきもち焼いちやうけど

何となく分かる気がする」

「出来れば彼女には 僕の事は告げない欲しいな。」

「言ったりなんかしないわ。 神田さんとキスしちゃったんだから、そう言いと香は黙ってうつむいてしまった。」

「神田さん 明日・・・もう今日だけど、どこか一緒に行こうよ。忙しい？」

もう午前3時である。さすがに20代には勝てない。いくらなんでもこのまま

寝ないでどこかへ行くなんて事は出来そうに無いし、さすがに眠くなってきた。

それほど飲んで無いのだがそれでもターキーをショットで7〜8杯は飲んだらどうか。

「香ちゃん元気だね。さすがに少し眠いよ少しここで眠っていいかなあ？」

「私眠くないから、神田さんベッド使ってください。よかつたらシヤワーも」

「いくらなんでもシャワーはマズイよ。ここでいいから」その辺りまでは憶えて

いるのだが、どれぐらい眠ったのだろうか？目覚めるとソファアの横で香りが

眠っていた。

裕子との間には子供は出来なかつたが、居たとすれば香よりは少し若いのだろうか？

そういえば3年ほど前に少し付き合ってた知恵は確か27歳だった。それこそ水商売の女性だったが妙に気が合い月に何度か食事をしたり、映画を観た。

もちろん男と女の関係もあつたし相性も合っていたが、知恵が故郷熊本に帰る

という事で連絡を取らなくなった。

腕にもたれて眠っている香がなにか寝言を言っている。聞き取れないが笑っている

ようだ。裕子と関係がなければきっと抱いていただろう。

香は十分魅力的だし会話も楽しい。少し運命を恨みなくなった。

t e m p t a t i o n (後書き)

t e m p t a t i o n

D i a n a K r a l l ダイアナ・クラール

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h

? v = K 4 f b D O Y B S Z Q

Draw the line

カーテンの隙間からさす光に起こされた時、香は横にいなかった。あのまま眠ってしまったのだろう。タオルケットが掛けてあった。ラックの時計を見ると7時40分だ、記憶の最後は3時半頃だったから

4時間は眠っていた事になる。やれやれ・・・こういう時どこでも寝れる

特技は困ったものだ。ダイニングの方から香の作る朝食のいい匂いがする。

昨夜はそんなに食べていなかったせいか急に空腹を憶えた。

「あれ？神田さん起きてたんだ。朝ごはんもう出来てるよ・・・ちよつと待って

はいこれ、タオルと歯ブラシ」そういつて使い捨ての歯ブラシを渡してくれた。

「ありがとう。世話掛けるね」顔を洗いながら鏡の自分の顔を見た。結構オツサンである。何故彼女があのような行動に出たのか？ひよつとすると

父親の影を追っていたのか？しかし、それにしても唇を重ねてきたのは妙だ

いったいどういう心理状態なんだろう？それともアルコールのせいか・・・」

「どうぞ、座って。お口合つかどうか」

テーブルの上には朝食らしい朝食が用意がされていた。ベーコンとソーセージを

焼いたものにスクランブルエッグ、野菜サラダにトーストといずれも真っ白な

食器に綺麗に盛り付けられていた。

「今コーヒー入れますから・・・」ウエッジウッドに注がれたコー

ヒールの香ばしさが心地よい。

「なんか新婚の食卓みたいでしょ？ どうぞ召し上がって」トーストにバターを

塗りながら確かに新婚の頃こんな感じだったのを思い出した。

「神田さん今日は帰っちゃう？」香が少し甘えるように言った。

「君は連休だったんだよね？じゃあ一日付き合うか。どこに行きたい？」

そういつと香の顔がさらに明るくなり楽しそうにガッツポーズをきめた。

仕草の可愛らしさは26歳には見えない。

「じゃあUSJがいい。」

「USJって・・・遊園地？」まさか遊園地とは思わなかった。もう何十年も

それらしき施設には行っていないし、その必要も無かった。

「行った事無いんだ。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンにもディズニールランドにも」

そういつと香はびっくりしたような顔をしていた。遊園地なんて大学の頃デートで

大阪万博の跡地にあつたエキスポランドに行ったのが最後だ。

「じゃあ決定ね。うれしいなー、何年ぶりかしら？3年・・・5年だ。その時付き合つて

たのは・・・あれ？やきもち焼かないの？」そういつと子供のような目で

こちらを見た。

「え？ どうしてボクが香ちゃんの昔の彼氏に嫉妬しなきゃならないんだい？」

ところでこの格好じゃ何だから家で着替えてから行ってもいいかな？それでそのままボクの車で行けばいいよ。」顔は洗ったがシャワーもしていない

のでどうもスッキリしていない。

家からUSJなら約2時間だ。昼過ぎには到着するだろう。

「ホント？神田さんの車で行けるんだ。じゃあ急いで用意しなくちゃ」

朝食を終え香が着替えをする間後片付けをしていた。一人暮らしが長いせいかな

家事全般は苦にならなのだが、香は最初嫌がっていた。しかし時間の事を言うと

渋々自分の用意をすることを承諾した。

香の家からタクシーで自宅のマンションに戻ったのは9時過ぎだった。

自分の部屋に女性を入れるのは初めてである。商社を辞めたときの退職金と

それまでの貯金で思い切って購入したマンションは、バブルも終わっていたので2000万程の買い物であったが、郊外とはいえ駅も近かったしスーパーが目の前にあったり

コンビニが1分以内に2軒もある好条件も決め手となった。

「神田さん綺麗にしてるんですねー」香が色んなところを見ながら言った。

別に見られてまずいものは何も無かったし、一人暮らしをするようになって

いつ倒れたりしてもいいように出かける時には部屋を片付ける習慣があった。

「シャワーしてくるから冷蔵庫から好きなもの飲んで待ってて。テレビの

リモコンはそこだから」そう言ってバスルームに入った。

D r a w t h e l i n e (後書き)

r a w t h e l i n e

A e r o s m i t h エアロスミス

h t t p : / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ?

v v P P L S V C A 6 D 8

神田がシャワーしている間に香はぼんやりと部屋の様子を見ていた。

「一人住まいの男性って皆こうなのかしら？」そう思いながら本棚の本を眺めると

読んだ事がある本があった。ゲーテの詩集である。中学生の頃背伸びして買っては

みたものの回りくどい表現に音を上げてしまった本だった。元々読書は嫌いではないが

さすがに中学生には難しかったのかもしれない。それにしても凄少量の本である。

参考文献や仕事関係も結構あるようだが文庫本の数が半端ではない。これをすべて読むのにいったいどれぐらいの時間がかかるのだろうか？

そう思うとどんな内容なのか少し気になり、その中の何冊かを本棚から抜いて

あらすじを探した。

几帳面なのか作家ごとに分けて並べてあったので一番量の多い作家から見たのだが

その中でもこの黒岩重吾という作家のはいったい何冊あるのか？この人だけで

数十冊が並んでいる。「さらば星座……」香はこの本が義母裕子の部屋にも

あったことを思い出した。全13巻で多分4000ページを超えている。あらすじは

背表紙に書いてあった。戦災孤児の話のようであるがページをめくって読み始めると

止まらなくなるほど読みやすい。リズムがあるのではないかという

ほどスピードが

安定して読めた。神田がシャワーから出てきたなら借りようと思えば本棚に戻した。

「ドストエフスキーかぁー、昔読んだな・・・」読んだといつても内容はすっかり

忘れていた。彼の作品では「罪と罰」が有名であるが何故か香りが読んだのは

「地下室の手記」であった。罪と罰を抜いてぱらぱらとページをめくった。

やっぱり難しそうである。特に登場人物の名前が頭に入らない。そして本棚に

戻した時バスルームのドアが開く音がした。香はあわててダイニングテーブルの

椅子に座った。神田の部屋は3LDKのようである。ダークオークのフローリングは

すべての部屋がバリアフリーで繋がっていた。LDKは広く20帖近くあるのでは

ないだろうか？対面キッチンには真っ白な鏡面仕上げのカウンターが付いていた。

壁一面壁面収納がセットされており本棚はそこの中にあつた。ダイニングテーブルは

4人掛けで少しアンティークな感じがし、かなり大きい3人掛けのソファアと

色を合わせてあるようだった。廊下には2部屋の扉があつりベッドルームと

物置部屋のようなのである。香が入ってきた時すべての扉が開いていたので分かった。

「お待たせ。」ジーンズにTシャツで現れた神田は昨夜よりかなり若く見える。

「神田さん、なんか全然イメージが違う」昨夜はジャケットに薄手

のシャツ

髪もムースか何かでセットされていたが、風呂上りの神田はサラサラと自然に

6：4ぐらいで分けているだけだった。白いTシャツを着た彼はとても40代には

見えなかった。

「さあ、行こうか？」麻のジャケットを手に持った神田が香を呼んだ。

近づくともボディソープのいい匂いがした。

神田の車はマンションのすぐ下に停めてあるワゴンタイプの国産車だった。

シルバーのボディはワックスがかかっている綺麗である。

「すぐに高速に上がるけど眠かったら寝てもいいからね」神田が優しく言った。

料金所を過ぎ暫くすると香はすっかり眠っていた。昨夜はあまり眠っては

いなかったのである。

B r e a t h l e s s (後書き)

B r e a t h l e s s

C a m e l キヤメル

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h
? v = Q V J K E H 8 h A O Y

Light my fire

平日のユニバーサル・スタジオ・ジャパンはそこそこ混んでいた。といっても何時間待ちといったアトラクションは僅かで殆どは20分以内で入る事ができた。以前映画館で観た映画やテレビで放映されたものなど

どれも馴染みの名前ばかりである。

その中の一つにジュラシックパークがあり、ボートに乗ってジュラ紀を再現した

セット内を探検するというストーリー設定で、最初は子供だましかと思っただけ乗っていた。

が、最後の仕掛けがかなり大掛かりで、ボートごと急斜面をプールに向かって突っ込む

というものである。その際巻き上げた水柱が容赦なく乗客に降り注ぎ服はそれこそ

ベトベトになるのだがボートの客は大歓声を上げて楽しんでた。

出口ではその写真を引き伸ばし販売しており、予約をすれば数十分で出来上がる

という事だったので頼んでおいた。それから2、3のアトラクションを廻ると既に正午を回っていた。腹が減ったという事もあり、アメリカの西部劇に出てくるようなレストランに入りステーキやポテトなどを注文していると香が言った。

「ねえ、ビール頼まない？なんだか凄く飲みたくて・・・」まあ夜まで遊んでいれば

アルコールは抜けるだろう。グラスビールを頼み2人で乾杯した。

「神田さん結構楽しんでたじゃない。どうして今まで来なかったの？」

「そうだなあ、しいて言えばチャンスが無かった・・・かな？こ

ういう所って

カップルや子供連れだろ？」ここが出来たのは10年前だったはずである。

裕子との関係がギクシャクしており仕事に没頭していた頃でとてもそんな

気分ではなかったし、その後付き合った女性とも夜のみに行く事はあっても

遊園地に行くという発想はなかった。

「今日泊まって行かない？そうしたらもつと飲めるんじゃない？ツインで

頼めば一緒に寝るわけじゃないし・・・」そう言つと一気にグラスを空けた。

まあ、実際少し睡眠不足もありこのまま遊続けて夜戻るのはキツイだろう。

それに大阪は何と言つても食べるものが旨い。夜は商社時代によく利用した

店に行きたい気がしてきた。

「よし、わかった・・・そうしよう。そうと決まればビールだな？」

「やったー。夜は何処へ連れってくれるのかなあ？」そう言つと香は手を上げ

ウエイトレスを呼びビールをジョッキで2人分頼んだ。

夕方まで遊んだ後車をホテルの駐車場に停めチェックインを済ませた。

予約したホテルは施設のすぐ隣で33階建てのタワーホテルである。案内された部屋は

22階だった。窓からの眺望はすばらしくフロントに頼んで安治川側の部屋にした

甲斐があった。

「素敵・・・」香はカーテンを開け大阪の黄昏を眺めていた。

阪神高速の照明が港大橋までうねりながら続いている。港大橋は日本最長のトラス橋で

大型コンテナ船を通すための桁下は50メートル以上あり車で通るときもその迫力に

圧倒される。

「あの橋渡つてみたい・・・明日通るかな？」

「じゃあ明日は堺の方へ行ってみよう。ボクの故郷みたいな場所だよ」

「大阪出身だったんですか？なんとなくイントネーションがそんな感じだったけど・・・」

「小学校低学年までだけどね」堺市には小学2年まで居たがその間にも大仙小学校と

上野芝の津久野小学校に通った。その後は父親の仕事で北九州の小倉に行ったが

半年ほどで引越しをし・・・その後小学校だけで6回転校した。

「美味しいもの食べに行こう。お腹すいたでしょ？」

「うん。たくさん遊んだから」香は飲みかけていたコーヒーをサイドテーブルに置き

レースのカーテンを閉めた。

タクシーで難波に着く頃にはすっかりネオンの似合う時間になっていた。

道頓堀を歩きながら商社時代に利用したレストランに香を案内しワインと

タンシチューを注文した。大阪で夜遊ぶ時はたくさん食べるのは禁物である。

何軒かハシゴするつもりで気の合うもの同士お互いのお勧め料理を少しずつ

食べるのが良い。そして食べながら次の店の話をするのも欠かせない。

この夜もこの後、たこ焼き・モツ煮込み・ぶぐ刺し・お好み焼き、

と2人で

分け合いホテルに戻ったのは23時前であった。食べながら飲んでいたので

結構な量を飲んでいた。

帰る頃には腕を組んで歩いていたが、恋人というよりは親子に近かったかも

しれない。

香の勧めで先にシャワーを浴びツインのベッドで横になってテレビを観ていると

いつの間にか眠ってしまっていた。

目覚めたのはベッドに潜り込んでくる香の気配を感じたからである。

> i 3 0 5 9 | 5 1 1 <

Light my fire (後書き)

Light my fire

The Doors ドアーズ

<http://www.youtube.com/watch?v=flOvM4Z355A>

> i3023 | 511 <

「左腕かしてね・・・」気づいた私に甘えるような声で香が言った。

ほのかな明かりでやっと顔を確認すると少し泣いているようである。「どうしたの、何か悲しい事あった？」腕の上で首を振りながら香が言った。

「夜の街をぼんやり眺めていたらなんだか寂しくなっただけ・・・暫らくこうしていてもいい？」

その言葉を聞いて急に愛おしくなり香を抱きしめた。

髪の毛からはコンディショナーの甘い匂いがした。このまま時間が止まってもいい

そう思えるくらい満ち足りた気持ちになっていた。部屋のカーテンは開けられていて

夜景が切ないほど綺麗である。

好きになってしまったのか？自問しながら髪をなでていた。

どれくらいそうしていただろうか？香が顔をあげ唇を求めてきた。

まるで昔から恋人だったのように自然に唇を合わせた。

二人はそのまま見つめあい、そして何度もキスをした。もう周囲のことや、これからの

事などどうでもよくなっていた。香とずっと一緒に居たい、そう思える瞬間だった。

香を求めずにはいられなかった。

部屋の明るさに目が覚めたのはもう8時を廻ったころであった。香はまだ眠っている。

うつむせで枕を抱くように眠っていた。少しめくれたシーツから見える白い肩が

美しい。そつと唇をあてると香が気づいて恥ずかしそうに微笑んだ。

「おはよう。よく眠ったね」

「おはよう。もう朝なの？」そう言つと香は唇を求めてきた。

「お腹空いちちゃったあ」顔を離れた香が笑いながら言った。顔にかかると髪がくすぐつたい。

白い胸元を引き寄せ力いっぱい抱きしめた。

軽い朝食を摂つた二人は阪神高速で港大橋を渡り堺に向かった。

「堺には何か思い出の場所があるの？」

「前方後円墳つて知ってる？アレの一番大きいのが仁徳天皇陵つて言つただけど

それがある場所なんだよ。今は公園になっているけど、子供の頃の遊び場さ」

昼前、大仙公園に到着した二人は初夏の木々の中を散歩した。

「この小さい塚が子供の頃の遊び場だったなあ」今は立ち入り禁止になっているが

ここに秘密基地を作つたり、柿を取つたりして遊んでいた。

「神田さんの子供の頃つてどんな感じだったのかな？写真とか見みたい」

「じゃあ帰つたら見せてあげるよ。香ちゃんのも見せてくれる」

「いいけど・・・小さい頃ブスだったもん」

「整形でもした？」という質問に「やだー」っと言いながらげらげら笑つた。

楽しい時間はあつという間に過ぎ帰りの車の中で香が言った。

「帰つたらまた一人ぼっちになつちゃうんだ・・・」寂しげな顔を見ることは

しなかつたが雰囲気で判る。私自身もそうであった。何年も一人暮らしで

その生活に慣れていたがやはりどこか不自然さがあつた。

料理を作るのが好きだから、テレビでどこかの名店などと紹介する番組を観ると

同じようなものを自分で作ったりした。それを酒の肴に音楽を聴いたり読書を

楽しんだり自分では最高の時間をすごしている気がしていた。

しかし昨夜美味しいものを共に味わい、美しい夜景と一緒に感じた事で、忘れていた

何かを目覚めさせたのかもしれない。

「うちに泊まっていく？」口から出た言葉はそれだった。

香のマンシヨンに寄り、明日の出勤のための用意を持って私のマンシヨンに戻ったのは

8時を少し廻った頃だった。

「香ちゃん明日は何時からなの？車で送ってあげるよ。」

「ホント！うれしい。会社は9時半だけど9時には着きたいから・

」

「じゃあここを8時に出れば大丈夫だね。朝ごはん今度は僕が作るよ」

「だめですよ。私が作ります。だって昨日凄く楽しかったんだもん。いつも朝ごはん作るのって、全然無意識の、作業みたいなものなんだけど・

なんだか幸せで・・誰かの為に何かをするのって楽しい事なのよ」
そう言い終わると私に抱きついてきた。こんな愛の言葉を聞くのは何年ぶりだろう？抱き合っただま静かな時間は優しく過ぎていった。翌朝香の作った朝食を食べ、少し混んでいる国道を香の職場に向かつて

走っていた。車からはFM放送が爽やかな朝の音楽を流していた。

少し早めに会社に着いてしまい、離れたところで缶コーヒーを買って待っていた。

「帰り迎えに来ようか？」もちろん今夜も一緒に居ようという意味である。

「7時に仕事が終わるから・・・7時半位かな？いいの？待ってても」

「もちろんだよ。じゃあ夕食の用意してから迎えに行くよ。鍋でもいい？」

「うれしい。一人じゃ作らないもの。あっ、時間だね。行って来ます」

そう言うと慌ただしい金曜日のオフィス街へ香は吸い込まれていった。

私は暫らくその後姿を見守っていた。

Moon River (後書き)

Moon River テイファニーで朝食を 主題曲

Henry Mancini ヘンリー・マンシーニ

<http://www.youtube.com/watch>

?v=UcXiJibBlou

In the Evening

家に戻って溜まっていた仕事の処理を済ませ、久しぶりに近くの大型スーパーへ

買い物に出かけることにした。今夜の鍋材料と香が泊まった時のための物を少し買うつもりだ。

枕やシーツ、バスローブ、パジャマなどがさばる物を先に買ってトランクに押し込んだ。

結構な量である。あとは夜の食材だけだ。鍋料理は独りの時も手間がかからないので

結構作るが、やはり会話があるほうが美味しい。久しぶりにしゃぶしゃぶでもするか。

いろいろと支度をしながらふと香の年齢の事を考えた。26歳といえば結婚適齢期だ。

一夜を共にしたとはいえお互いの事はまだほとんど知らないし17歳の年の差は

やはり気になる。これから素敵な恋をして結婚し子供を生んで・・・

・
芸能人などを見ればこの年齢で再婚し子供を持つ人もいるようだが、自分では

どうしても先の事を考えてしまい、今はまったく考える事ができない。

それに香だっつてずっとこんな中年と一緒に居たいと思うかはわからないだろう。

偶然出会ってこうなったのだ。

時間にすべての舵取りを任すのも良いかもしれない。

金曜日の町は賑やかだ。特に今夜は明日からのイベントのためセントラルパーク

付近には屋台がすでにオープンしていた。
カップルが仲良くソフトクリームを食べながら横断歩道を渡っている。

香は待ち合わせ時間丁度に現れた。

「待った？」

「今来たとこだよ。ぴったりだったね」

「この通り混んでるから、車長くは停めれないと思って……」
「こついう心遣いが気持ち良い。香に引かれる理由はいくらでも出てきそつだ。」

自分でも少し可笑しくなった。こついうのを欲目というのだろうか？

「神田さん、なんだか楽しそつね。そつだわたしのアルバムを持つていくわ」

「整形前の顔が見れるんだ、楽しみだなあ」

「また言つた。酷いんだから。」

「そつじゃ無いさ。今の香が可愛いって言つてるんだから」

照れるような言葉を言つたあと何故か笑いがこみ上げてきた。

夕食を終えシャワーを浴びた二人はリビングでDVDを観る事にした。

今日買つてきたシルクのパジャマを着た香が窓の外を見ている。

「神田さんの部屋から見える夜景もきれいな。高速道路の明かりがずつと続いている」

「こつちにおいで。そろそろ始まるよ。それに喉渴いたでしょ？ビールで乾杯しよう」

リラックスした時間がゆつくりと流れていた。肩に回した腕を香は優しく抱いている。

ディスプレイは今年上映されたハリウッド映画を再生していた。

「この映画観たかつたの。封切られた頃はそつは思わなかつたんだけど雑誌などの

レビューを見ていて、何で観にいかなかつたんだろう？つて後悔し

てたの」

「映画館には誰かと行くの？」

「気になる？」そう言つと頬にキスをしてきた。

「……少しね」本当はあまり気にはならなかったがそう答えておいた。

それでも香は頬を僅かに膨らませながら、少し甘えた声で拗ねるように言った。

「なーんだ」映画は中盤の盛り上がるシーンになっていた。

翌日も香を会社に送り、夜の約束をして一日が始まった。

今日はライブ仲間の開く絵画の個展へ顔を出す約束をしている。どんな絵を描くのか

見たことが無いので分からないが、印象派の影響を受けていると言っていた。

会場に着くと受付に彼が居た。初日という事もあってかロビーには大勢の招待客が

談笑していた。

「やあ、神田さん来てくれたんですね。お忙しいところすみませんでした」

高木隆一は少し照れたように握手を求めてきた。

「凄く盛況じゃないですか。おめでとうございます」

「ありがとうございます。良かったら後でコーヒーでも。ラウンジで用意しますので」

「じゃあ早速見させてもらいます」

高木の絵は迫力のあるものが多かった。風景画も50号を超えるものばかりだ。

中でも目を引いたのは150号を超える抽象画だった。

これには皆ため息をもらせていた。

一通り見終わってロビーに戻ると、高木が近づいてきた。

「あの抽象画は凄かったですねえ。迫力もだが、何か欲望……ま

るで性欲のような

ものを感じ取れましたが・・・すいません表現が稚拙で」

「神田さんありがとう。まさにその通りなんです。アレは性をテーマに描きました」

「ラウンジへ行きましょう。コーヒーを用意させます」

高木というのは面白い男で、ジャズクラブで会った時もいつも違う女性を連れていた。

最初の頃は彼女ですか？などと聞いていたが、そのうち皆見て見ぬふりをしていた。

しかも美しい女性ばかりなのだ。ひよつとすると絵のモデルだったのかもしれない。

それにしては今回の個展には一枚として人物画は無かったが・・・

「神田さんこちらへ」高木は革張りのゴージャスなソファを指して言った。

「印象はどうでしたか？神田さんの意見が一番気になるですよ」
「僕の意見なんて・・・まったくの素人ですから」

確かに絵画は好きなほうで、よく地元の小さな個展にも足を運んでいる。しかし

絵心はまったく無く、褒めるといっても漠然と心が動いたとかそんな表現しか

出来ない。

「高木さんの風景画は素直に美しいと感じました。テクニックなどは分かりませんが

何かそこに無いものを描いているような・・・そう、過去の思い出とか・・・」

そついい終えるなり高木は握手を求めてきた。顔は満面の笑みをうかべている。

「神田さんには何も隠せませんね。あの風景はすべて付き合っていた女性と

行った場所です。その頃の気持ちを表現しました。ディテールや色

は思いつくままです」

「どの風景も寂しげなのは別れた女性達への未練ですか？」

「未練・・・そうかも知れませんが。ただ感傷はあっても未来への希望の光も」

描いているんですが・・・」

「抽象画の方は・・・何というか、失礼を覚悟で申し上げますと・・・」

高木が身を乗り出してきた。私のような素人の意見がそれほど面白いものなの

だろうか？ 言葉を続けた。

「一つ一つの絵が何か強烈な個性を持っていて、エロティシズムのようなものを

感じてるんです。まるで女性を描いてるんじゃないかって思うくらいに・・・」

そこまで言う和高木は深く深呼吸をした。

暫らく沈黙の後、ゆっくり話し出した。

「神田さん、神田さんとはあのジャズクラブでお話させてもらってるだけだが

何か私と共通するものをずっと感じていました。その理由が今日分かったような

気がします。あなたに見ていただけてよかった」高木は自分の絵について話し出した。

抽象画の1枚1枚はやはり付き合ってきた女性達だという。それを人物画に

するのでは無く色で表現しようと考えたのだそうだ。しかし何度描いても後で見ると

何も感じなかったらしい。そこで付き合っていた女性を他の男に抱かせ、嫉妬の中で

描いた時、これまでに無い手ごたえを感じたのだという。

しかしその嫉妬も何人も男に抱かせるうちに無くなってしまい、

結局女性とは別れる

事になる。そうやって次から次へと女を渡り歩き、あの大作に行き着いたのだという

事だった。

話を聞いていて少し怖くなった。作品に対するその執念、私には理解しがたいもの

がある。高木はあの大作を描き上げてから。筆を握っていないという。

今一緒に居る女性を愛しており別れたくないからだと言っていた。

夕方、香を迎えに行く頃には僅かな疲労感を憶えていた。

> i3030 — 511 <

In the Evening (後書き)

In the Evening

Lead Zeppelin ヲシシシシシシシシシシ

http://www.youtube.com/watch

?v=1YqBFL-my5A

Love Of My Life (前書き)

少し性的な描写が含まれています。

> i3022 — 511 <

夕食はペペロンチーノと豚肉の香草焼きを作り、テーブルワインも用意したので

ちよつとパーティのような雰囲気になった。BGMはもちろんジャズだ。

まずはビールで乾杯。

「神田さん料理上手なんだ。私あんまり凝った料理作れないもん・あつ、このお肉

美味しい。何の香りかしら？いい匂い」

「色々入れたけど・・・多分ローズマリーが一番強いんじゃないかな？

ベランダで育ててる」

「そんな事もやってるの？素敵」美味しそうに料理を食べながら言った。

「そうそう。今日はちよつと面白い事があつてね。このあいだのジヤズクラブで

よく一緒になる画家が居るんだけど、今日彼の個展に顔を出したんだ・・・」

「いいなあ、私も一緒に行きたかった。でも、良くないよね？一緒になんて・・・」

「なんで？別に悪い事してるわけじゃないから良いんじゃない？」

香は多分私の立場などを考えて言っているのだろう。先日会ったばかりで既に

恋人であるかのように行動するのは軽率に見えるのではないか？そう思ったのだろう。

「今週の日曜日までだから香は休めないなあ。また違つのを見に行

「とてもいいし」

「それでどんな感じだったの？」ペペロンチーノを美味しくそうに食べながら聞いてきた。

「それがだ、その画家が・・・高木ってヤツなんだけどね。毎回というほど違う女性を

連れて来るんだ。ずっとモデルか何かだろうって思ってたわけ。もしたら・・・」

食事中に話してもいい話題だったか、少し躊躇していると香が言った。

「何よ、途中でやめちゃうなんて余計に気になるでしょ？言つてよ」
「パスタはすでに二人ともたいらげっていたので、ワインと香草焼きを持ってソファーに移る事にした。」

「驚いちやいけないよ。その作品というのは・・・」
個展であった一部始終を香に説明した。少しの沈黙があった。

「神田さんはそれを聞いてどう思ったの？」少し酔ったのかうつろな目で香が言った。

「自分の恋人が他人に抱かれるのをじっと見てるなんて、想像できないし

もしそんな状況を作らなければ作品が出来ないのなら、絵を描くのを諦めるかも

「しれないな」

「そうかしら？私のこと少しも焼きもち焼かなかつたじゃない。平気なんじゃないの？」

それとも・・・私の事好きじゃないの？」痛いところをついてきた。確かに香の過去の恋愛に対して嫉妬や詮索をする気はなかった。

もちろん付き合っている期間が短すぎるせいもあるだろうが、それらすべてを含めて

現在の香を好きになったのだ。そう言いたかった。

「それとこれとは状況が違うよ。香こそどうなんだい？ボクがそう

しなきゃ絵を描く事が

できないって君に頼んだとしたら・・・」

暫らく黙って考えているようだった。そしてサイドテーブルにワイングラスを置くと

いきなり唇を求めてきた。それはいつにも増して激しく濃厚なものであった。

「どうしたの？酔っちゃったのかい？」そう聞く私に更に激しく抱きついてきた。

そのままソファに倒れこみ二人は激しく身体を求め合った・・・

私の静かになった鼓動を聞きながら香がつぶやいた。

「私もあなたの為ならきつと抱かれると思うわ。嫌だけど・・・」
香の言葉を聞いてまた身体が熱くなるのを感じた。

「喉が渴いたよ・・・何か飲んでくる」私がそう言うと、香は上体を起こしワインを

口に含み口移しでそれを流し込んできた。

「美味しい？」そのまま二人はもう一度お互いの気持ちを確認しあった。

私はその激しさの中で、香に溺れてゆきそうになる自分を感じていた。

L o v e O f M y L i f e (後書き)

L o v e O f M y L i f e

S a n t a n a サンタナ

<http://www.youtube.com/watch?>

v=Raque1wueE

> i 3 0 3 1 — 5 1 1 <

初めての夜から1週間。休みの日に必要なものを持って来ようということになった。

洋服類や化粧品、お気に入りのグッズなどを二人でダンボールに詰めていると

チャイムを鳴らす音がした。

香が出ると宅配便だった。送り主は上田裕子、別れた妻からである。「何かしら？」香は不思議そうに袋を開けた。中には小さな箱が入っていた。

開けてみると中には誕生日のメッセージとネックレスが入っていた。(香ちゃん、お誕生日おめでとう。来月からパリにピアノのレッスンを受けに行くので

少し早いけどプレゼントを贈ります。)

メッセージにはそう書いてあった。ネックレスは小さな宝石がついた可愛い

デザインのものであった。香は少しし困惑したような表情をしていた。

「あまり気に入らないのかい？」たずねると首を横に振りながら言った。

「違うの。裕子さんが貴方の奥さんだったって考えると・・・嫉妬しちゃうの

私、嫌な女でしょ？」そう言いながら涙ぐんでしまった。

この時ばかりはどう声をかけていいのかわからなかった。裕子と愛し合っていたのは

事実だし、今も嫌いなわけじゃない。しかし、だからといって今、香と比べるなど

まったくあり得ない。そんな事は香もわかっているはずだ。

「香のことが誰よりも好きなんだよ。分かっているだろ？」その時はそう言っ

て抱きしめる事しかできなかつた。

「ごめんなさい。私こんなに嫉妬深いなんて思わなかつた、貴方の事を本当に

愛しているの……嫌いにならないでね」そう言いながら私の胸に顔を埋めた。

「明日も休みだろ？今夜あの店へ行こう。香のことを皆に紹介するよ」

香を安心させてやりたいそんな気持ちから出た言葉だつた。

その日、ジャズクラブ「クォーター」は二人が主役だつた。

かわるがわるに仲間達がテーブルにやってきて経緯を聞いた。その都度出会いから

現在までを説明し、まるで結婚式の会場のような雰囲気だつた。

ふと香を見ると幸せそうな顔をしていた。

その後数週間が過ぎても香りとの生活は満ち足りたものだつた。

朝、香を送ると一日が始まり、夜は私の手料理でゆつくりとした時間

を過ごす。以前ほどではないがライブにも何度か行つた。生活で変わった事といえ

ば朝食を摂るようになった事と、夜寝るのが早くなつた事ぐらいだが、充実

感はまったく違つた。ネットの注文は一時に比べれば下がつたものの

それ以外のアフィリエイト等の広告収入が伸びていおり収入の面でも香と二人

で生活する分にはなんら不自由は無かつた。

その日も二人で「クォーター」の入り口に近いテーブルで、fun ky-dogの演奏を聴きながら

ワインを傾けていた。いつに無くジェイの軽やかなギターの音色が心地よい。

二人を祝福するかのような優しい演奏だった。

「神田さん、お久しぶり」その声に振り向くと画家の高木がそこに居た。

隣には一瞬息を呑むほどの美しさを持つ女性が立っている。

彼女があの大作のモデルだろうか？

高木があれ以来、絵を描かなくなった理由が分かるような気がした。

「神田さん、お邪魔で無ければご一緒させていただいてもよろしいでしょうか？」

二人を同席させ香を紹介した。高木は目を細めながら可愛らしい女性だと褒めていた。

最初香は彼が先日話した画家という事に気づいてはいなかったが、話をしているうちに

分かったようである。

「高木さん、今も絵は描いて無いですか？」

「いやいや、最近またどうしてももう一枚描きたくなってきまして・

・・・やはり

絵が好きなんですよね。あの作品を超えるものを描いてみたい。

そんな事ばかり

考えるようになってしまいました」意味ありげに隣に居る美女の横顔を見ていた。

この女性も高木の前で誰か他の男に抱かれるのだろうか？

演奏が終わり帰り際、高木が私たち二人に今度一緒に食事でもしないかと提案してきた。

是非自分のアトリエでパーティをやりたいと言うのだ。

香と相談し水曜日なら大丈夫だと伝え、その日はクォーターを後にした。

「晋一郎さんが言ってた絵が見れるのね。凄く興味があるわ」タクシーを拾うために

大通りまで歩く途中香が言った。

「見た感じは普通の抽象画だからどんな風に見えるか……そういえば来月は

香の誕生日だったね。6月16日はどこか食事に行こうか？」

「そんなのより二人だけで過ごしたいなあ。混んでるお店とかじゃなくて……」

「何曜日だっけ？木曜なら休めるんじゃない？どこか旅行に行こうか」

「ホント?!うれしい」香が抱きついてきた。

じゃれあう二人の影をセントラルパークの照明が演出しているようだった。

Lied ohne Worte, op. 19, 5 (後書き)

Lied ohne Worte, op. 19, 5 無言歌

集より

Mendelssohn メンデルスゾーン

<http://www.youtube.com/watch>

?v=vkVdeZDkJwM

Song For Bilbao

> i3032 — 511 <

翌週、二人は高木のアトリエ兼自宅に出かけた。夕方6時頃来て欲しいという事だった

ので、その前にデパートでワインを買って行く事にした。

「ねえ、どんなお宅なのかしら画家さんの家って。何だかドキドキするわ」

デパートのワインコーナーで色々選びながら香が言った。高木邸は比較的都心部に

近い住宅街だった。マンションなどが乱立する中、古くからの住まいがまだ結構残っている。

タクシーが到着したのは6時10分頃だった。

高木邸は昭和40年代頃流行した洋館風のデザインで、家の周りや門などはツタが見事に

覆っていた。大きさはそれほど大きくは無く80坪くらいであろうか。ガレージには

古いサーブが停まっている。

「素敵なお家だわ。いかにも画家が住んでいそうな……」
インターホンを押すとすぐに高木が中から現れた。

「ようこそいらっしやい。待ってましたよ。運転手はすぐに場所が分かりましたか？」

案内しながら高木は楽しそうに話していた。門からのアプローチは石畳がひいてあり

その周りに野草が生えている。イングリッシュガーデン風とでも言うのだろうか。

エントランスには大理石が貼ってあった。

香が買ってきたワインを高木に渡すと、奥から彼女を呼びダイニング

グにもって行くように指示した。

「アトリエを是非香りさんにも見ていただきたくて」そう言うと廊下から裏の出口の方へ案内した。それにしても香を名前で呼んだのには正直驚いた。一度しか名前を

言っていなかったし、私自身高木の彼女の名前までは覚えていなかったからだ。

アトリエは以前裏庭があった場所に建てられているようだった。

なかに入ると10畳ほどの板の間に描きかけのキャンバスや木製の机、資料の棚などと

白いソファが綺麗に配置してあった。絵の具の独特の匂いやデッサン用の人形など

初めて感じる空間だった。

「どうです？面白いでしょ。まだ描ききってませんがこれが新しい作品です」

前回のものとは違い100号ほどの絵は、ただ黒く塗っただけのよくな感じに見えた。

「前回展示したものの何点かが2階に在ります。どうぞ」そう言つてアトリエの脇にある

階段を登り始めた。そこからはアトリエ全体が見渡せるような作りになっている。

2階の部屋は6畳ほどだろうか、倉庫のようにひんやりとしており布が掛けられた絵が

何点か置いてあった。そこにはあの大作も置いてあり、すべて見させてくれた。

「凄い・・・」香が息を呑むように見つめていた。どうやって描いたかを事前に

話してあるだけにその世界を覗こうとするかのようであった。

何分かの静寂の後3人はリビングに戻った。そこには色とりどりの

料理が用意してあり

キャンドルが美しさを演出していた。

「隆一さん、神田さんに凄くいいワインをいただいてるわよ」「そう
言っ

てテーブルの上を示した。

「これは・・・シャトー・ラトゥール1991年。いやーこんなに
高価なものを・・・

ありがとうございます。早速開けましょう」「そう言っ

てオープナーでコルクを抜くと4つのグラスにワインを注いでいった。

Song For Bilbao (後書き)

Song For Bilbao

Pat Metheny Michael Breck
e
r

http://www.youtube.com/watch
h?v=Sp9DYaijXT0

うーん、ラトウール飲みたい・・・

「それじゃあ、4人の出会いに！」持参したラトウールで乾杯し、オードブルをつまんだ。

「美味しい・・・」香がびっくりしたように私の顔を見て言った。91年は他の年に比べてもかなり評価が高い。もちろんヴィンテージの類では無いので

値段もそこそこである。今日多分開けるだろうとの思いから選んでみたが、香の喜ぶ顔を見てその甲斐があったと思っていた。

ワインを飲みながら暫くお互いの事などを紹介し合ったりした。

高木の彼女は池田弘子といい、24歳だという。ファッションモデルもやっているそうで

以前は女性向け雑誌の専属モデルもしていたらしかった。高木は確か50前である。

そのバイタリテイに感服する思いがした。

「弘子、メインを頼めるかな」高木がそう言うと池田弘子は静かに席を立ち、ダイニングに向かった。

「あの、私も何かお手伝いします」香はそう言うと後をついて行った。

私が感心しながら見ていると高木が話しかけてきた。

「香さんすばらしい女性ですね。いつも知り合いになられたんですか？神田さんも

隅に置けない人だ」

「いや、実はまだ一月も経ってないんですよ」私がそう言うと、高木はそれを見ればすぐに

分かると言った。私がいつも香りを見ていいると言っただ。自分では意識してないが

多分そうなのであろう。

そうこうするうちに、女性陣が楽しそうに笑いながらメインディッシュを運んできた。

旨そうな肉料理だ。

一通り食事を済ませコーヒを飲んでみると、高木が面白い事を言い出した。

香りの絵を描いてみようと言い出したのだ。簡単なデッサン画なら30分も

掛からないということだった。

「こんなチャンスはめったに無い、描いてもらいなさい」私がそう言うと香は頷いた。

最初は4人でアトリエに入ったが、気が散るようなので私と池田弘子だけがリビングに戻った。

「高木は神田さんの事をすごく誉めてました。私の絵の事が理解できる数少ない

人間だと……高木は、アノ事言っていました？」

池田弘子は妖艶とも思える表情で話しかけてきた。

「大体の事はお聞きしました……が、僕には少し難しすぎる」

「アトリエにある新作はまだ下色を塗っただけ……ひよっとすると彼は貴方に

私を抱かせたいんじゃないかしら？」そう言うとアトリエの方をチラッと見た。

「???・・貴女はそれでもいいと思うの？」私の問いに少し考えるように自分の指を

見つめながら弘子が言った。

「私が最初に言ったの。あの店で貴方に会った時そう感じたの。この人なら

彼を奮い立たす事が出来るって」

まさかそんな事を高木が考えていたなど、まったく想像していなか

った。

その話を聞き、私はすっかり困惑してしまった。ここへは来ないほうが良かったのかも

しれない。香と付き合っていないかつたとしても、そんな話はきつと断つただろう。

「彼、もう一年近く絵を描いてないわ。新作もあの状態からまったく進んでないの

香さんを描くって言ってたけど・・・描けるのかしら？」

「弘子さん、どうして僕なんだ？もつと素敵な男性は居るだろう若くて遅い・・・」

私がそう言う理由を説明しだした。以前にも弘子のボーイフレンドと絡み合って

居るところを描こうとしたが、高木の筆は進まなかったという。

高木のことを理解している神田晋一郎だから抱かれてみたい。それが理由らしい。

それにしても30分をとうに過ぎている。そろそろ戻ってくるのではと様子を伺っていたが一向にドアの開く音がしない。少し苛立ちにも似た感情を抱いていると弘子が言った。

「神田さん、やきもちを焼いているんでしょ？あのソファアに座って高木に何もかも

見られているような気持ちになってる香さんに・・・」

凶星であった。これだけの美女を跪かせる高木の絵筆の魔力が怖いと感じていた。

そろそろ1時間になろうとした頃ドアの開く音がし、香と高木が戻ってきた。

「いやーすみません・・・久しぶりに人物画を描いたのですっかり勘が鈍っていて」

そう言つて今描いたばかりの香りのデッサンを見せてくれた。

私は一瞬言葉を失つた。これが色もつけずに描いた絵なのか？と思うほど美しかった。

そう思って香を見ると、先ほどより美しさが増しているではないか・
・
これが、この男の魔力なのか？

私はただ、香がこの男の魔力にとり憑かれていない事を祈るだけだった。

> i 3 0 3 3 | 5 1 1 <

S p a i n (後書)

S p a i n

C h i c k C o r e a

?v=KOFs40ekTV0&feature=watch
http://www.youtube.com/watch

> i3053 — 511 <

:

帰りのタクシーの中で香はグッタリとしていた。それがワインのせいで無い事は

私にもわかつている。

「高木さんって凄く不思議な人……」香は何か思い出すように遠くを眺めていた。

その夜は中々寝付けなかった。池田浩子の艶かしい唇や指先がずっと頭から離れない。

2時頃まで眠れずリビングに行きビールを飲んでいると香が起きてきた。

「どうしたの？ 眠れない？」冷蔵庫から缶ビールを出し私の隣に座った。

「今日は何だか凄く疲れたわ……あのソファに座っているとあの人に裸に

されているような気がしてきて……」そう言いながら私にもたれ掛ってきた。

「すばらしい絵だった。それに……描いてもらった後の君が美しくなっているのには

正直驚いたよ」香は少し戸惑ったような表情をしている。

「私ね……絵を描いてもらいながら濡れていたの。自分でも何故そうなったのか

分からないけど、あの人が私の中に入ってきているような錯覚に囚われていたの」

あの時感じていた不安な気持ちは多分これだったのだろう。

香の表情の変化はエクスタシーを感じた後の穏やかな表情だったのかも知れない。

あの場所で高木が体験している嫉妬のような興奮を、実は私が体感させられていたのかも
しれないとあらためて気づかされた。

私はその時、自分の身体が制御できないほど熱くなってくるのを感じた。

香を征服したい。独占し自分だけのために心を開かせたい・・・その夜は自分でも信じられないほど欲情していた。

翌日、昼過ぎまで眠ってしまいベッドルームを出ると朝食の用意と手紙が置いて

あった。

予約してあるので美容室に行ってきます。帰りにスーパーに行くので迎えに来てね

そう書いてある。

だるい身体を引きずる様にソファに倒れこみ、テレビのスイッチを入れた。

報道番組が女性タレントの覚せい剤使用について特集を組んでいるようだ。

何気なく画面を見ながら短い眠りに落ちていた。

夢を見た。場所はあのアトリエだ。

私は弘子を抱いており高木がそれを見ている。

場面が変わり私はアトリエの階段に立っていた。高木が女を抱いている。

上になって激しく動く女の背中が見える。白い透き通るような背中が美しい。

その背中に触れたくなり近づいてゆく、と・・・女の顔は香だった。

背中にびっしょり汗をかき目が覚めた。そのままフラフラとバスルームに行き

冷水を頭からかぶった。

その後暫らく高木の名前は二人の間に出なかった。むしろ意識して出さないように

していたのかもしれない。香もそれは感じていただろう。

「あなた最近变よ、壊れちゃうんじゃないかってくらい激しいんだもの……」

私は幸せだけど「一度だけこう言った事があつた。

自分でも信じられないほど毎晩欲情して眠れないのである。

その日私は、香の誕生日のプランを立てるため旅行代理店にパンフレットを

貰いに来ていた。近く的大型ショッピングセンターの中にあり、商社時代からよく顔を出している。

「あれ？清水さんじゃないですか。お久しぶりです渡辺です。今度この店に

配属されました」商社時代よく会社に来てもらっていた新人営業マシナだったが、胸の

ネームには店長と書かれていた。

「ナベちゃん、偉くなつたんだね。店長さんなんだ」恐縮しながら頭を掻く仕草は

変わっていないようである。この店は香の会社とは違うグループのよう

で扱ってるものも違っていた。

「清水さん、奥さんお元気ですか？」彼は添乗員として国内観光に何度か着いて来た

ことがあり、その時から裕子を知っていた。

「実は離婚してね、君が最後に来たのは……12年前かな？ベネズエラの旅券

頼んだのは？あの後ナベちゃん転勤か何かで……」懐かしい思い出話をしてい

あつという間に時間が過ぎていた。彼の話を聞くと、社内不倫が発覚し5年間転勤させられていたという。こういう事を平気で言うところが気に入り、社内の旅券はすべて彼に頼んでいた。この際と思い、彼に1泊2日の国内プランを紹介してもらおう事にした。

出来れば近場でのんびりと過ごせ、香のバースデイもサプライズしてくれるような

そんなプランを探していた。彼が勧めたのは長野県の白樺湖にあるペンションだった。

バスツアーに便乗するプランで片道約2時間半だという。朝は少し早いがそれに決める

事にした。手続きをしていると彼が言った。

「あれ?・・・神田さんになったんですか?」彼は結婚している時の私しか知らないの

で別れた妻の苗字が清水であったこと。自分には兄弟が居り家の名前を継ぐ必要もなかった

ことなどを説明した。

その日帰ってから、この旅行の件は香を驚かすため秘密にしておいた。

SUNNY (後書き)

SUNNY

BOBBY HEBB

http://www.youtube.com/watch

h?v=N9FNFCk8CU

> i3054 — 511 <

:

6月に入り気分的にはだいぶ落ち着いてきていた。高木の亡霊からも少しは解放されており

逆に香が冗談で不満を漏らすこともあった。誕生日が近づき旅行のプランのことを話すと

早速着て行く洋服の事や現地の観光の事などをあれこれ話し出した。楽しそうな香を

目を細めて見ていると、急にまじめな顔をして言った。

「ねえ・・・人の話、聞いて無いでしょ？私がせっかく白樺湖周辺の事を話してるのに・・・

二日しかないんだからちゃんと予習しとかなくちゃ。早く来週来ないかなあ」

予習も何も香はプロである。私なんかの知らない事もよく知っているだろう。今回の

旅行の話をしたときも、自分の会社で申し込むのはやはり気が引けると言っていたが

その気になれば簡単に探せるはずである。

そんな事を考えていると香が何着か服を持ってきて私に選べという。

「その草色のワンピースが可愛いんじゃない？でもきつと寒いから上着は持っていった

ほうがいいね。じゃあ明日の帰りにサンダルと帽子を買いに行こう、そのまま外食だ」

私がそう言つと香はガッツポーズをして胸に飛び込んできた。危うくワイルドターキーを入れたグラスを落とすところだ。

旅行当日は天候に恵まれ、中央高速から見える山々の緑が美しい。
途中駒ヶ岳の

パーキングに休憩で入ったので二人でフランクフルトを食べた。楽しそうに笑う香を

見るのが一番心休まる時間になっている。最近香の事を考えてばかりいるように

なっている。恋をしているのだろうか？自分でも不思議な感情だった。

諏訪インターから茅野を廻って白樺湖に向かうバスの中で、香は私の肩にもたれ静かな

寝息を立てていた。

白樺湖はまだ少し肌寒かったが、晴天のおかげで日差しが気持ち良い。

ここからペンションまでは団体客とは別行動になる。1泊とはいえ荷物が結構あるので

ペンションから送迎車に来てもらい、荷物を置いてから遊ぶ事にした。

オーナーに借りた自転車のペダルを漕いでいると、少し汗ばむ位気温も上がってきた。

湖畔のレストランで昼食を摂りペンションには4時ごろ戻ったが、ダイナーは6時半から

なので露天風呂に入ってくつろぐ事にした。

それほど大きくは無い鉄平石造りの露天風呂は貸切にすることが出来た。

「今夜は星が見えそうね・・・」香はそう言いながら真っ青に澄み渡る空を眺めている。

「9時過ぎにもう一度入ろうか？きつと星が見える」積み上げた石の間から流れる

お湯の音を二人で静かに聴いていた。

ダイナーにはサプライズが用意されていた。Happy Birth

dayの曲が流れオーナーが
ケーキを運んでくる。周りの宿泊客達も拍手をし雰囲気盛り上げ
てくれた。

香は大喜びだった。ワインを頼み二人で乾杯をした。

フランス料理店で修業したオーナーの料理はとても美味しく、二人
とも幸せな時間を

過ごす事が出来た。

香と出会ってからの時間があまりのも素晴らしく、まるで夢の中に
居るのでは無いかと

時々思う事がある。この時もキャンドルの向こうで微笑む香が泡の
ように消えてして

しまいそうで抱きしめたくなった。

:

> i 3 0 6 1 | 5 1 1 <

BELIEVING IN DREAMS (後書き)

BELIEVING IN DREAMS

YOSHIAKI MASUO

http://www.youtube.com/watch

?v=H1-YY5i6boo&feature=rel

ated

Summer Lightning

11<

> i3065 | 5

部屋に戻ると香を思いつきり抱きしめた。

「どうしたの？急に・・・」言葉を遮りそのままベッドに倒れこんだ。

甘い時間が二人を包み込んでいる。この時間がずっと続いて欲しい、本気でそう思える

瞬間だった。

エアコンを高めに設定していた事もあり二人はうっすらと汗をかいていた。

「喉が渴いたよ・・・」香を見上げながらそう言うと、ナイトテーブルからグラスを取り

そのまま口移しでワインを流し込んできた。

「美味しい・・・」何か言うとする香りの口をふさぎ、また夢の続きに身を委ねた。

軽い疲労感から1時間ほど眠ったあと二人は露天風呂に入る事にした。

まだ少し冷たい夜の風が上気した顔を優しく冷ましてくれている。

露天風呂から眺める白樺湖の星空は素晴らしかった。

暫らく二人は黙って湯船からこの空の宝石箱を見ていた。

6月末の火曜日にジャズクラブ「クォーター」に顔を出すと高木隆一と池田弘子が

来ていた。先日の礼を言い同じテーブルに座ると暫らく忘れていた感覚が

戻ってくるのがわかった。香も同じ気持ちなのだろう、少しぎこちない感じがする。

会話の中では高木の絵の事に関して出来るだけ触れないようにしていた。

話題は高木の所有する軽井沢の別荘の話になり、毎年7月中旬から9月上旬までは

そちらで暮らしているという。部屋はたくさんあるから是非時間の都合がつけば

遊びに来て欲しいという事だった。勿論、社交辞令で軽く返事はしたがそんな予定を

立てるつもりはその時はまったく無かった。あの事件が起こるまでは……

7月に入った金曜日いつもの様に香を迎えに行くと、待ち合わせの時間を過ぎてモ

現れなかった。いつも時間に正確だし遅れるときは事前に携帯にメールをしてくれていた。

何度か確認したが受信は無い。30分程した頃ようやく香から電話があった。

「もしもし、晋一郎さん？ごめんなさい。もっと早く電話すれば良かったんだけど……」

私、今高木さんの家に来ているの……こちらに来てくれないかな」

言っている意味がわからなかった。何故香が高木の家に居るんだ？兎に角不安になり

高木の家に車を走らせた。

チャイムを鳴らすと池田弘子が中から出てきた。

「何があつたんですか？何故香がここに？」中に急いで入ろうとする私を制し彼女が

言った。

「ごめんなさい。私がお願いしたんです。香さんのお昼休みに電話をしてしまって……」

説明によると高木はやはりまったく筆を握らず、最近は少しノイロ
ーゼのような症状まで

現れていて、それを誤魔化すため毎日昼間から酒を飲んでいたので
という。

ただ、香の絵を描いたあの日は調子が良かったらしい。あのまま絵
が描けるのではないかと内心ほっとしていたが、結局はあれ以来ア
トリエにも入っていないらしい。たまりかね今日香に相談したら仕
事を休んで来てくれたのだという事だった。

「まだ香はアトリエに？」

「2時からずっと・・・入りたいけど・・・怖くて。もし邪魔
した事によって

彼の症状が悪化したりしないかと」

「香は大丈夫なのか？何もして無いんだな？」話を聞いて香が自主
的に行動している

事は理解できる。電話の様子も緊迫したものは無くむしろ落ち着い
た感じであった。

彼女が私を呼んだのだ。黙って待つ事にしよう。そう決心し池田弘
子と一緒に

リビングで香を待った。

「神田さん、香さんのこと怒ったりしないだね」心配そうに私の顔
を見て言った。

「怒ったりなんかしませんよ。ただ僕も貴女と同じように不安なん
だ」

「私が・・・不安？」

「高木が香を気に入ってしまい貴女から気持ちが悪く離れてゆくのでは
ないか？そういう事です」

「高木の気持ちはもうとっくに私から離れているのよ。ちゃんとわ
かっている・・・」

でも・・・私は彼を愛している。彼から離れたくないの。ここに居
れるだけで幸せなのよ」

そう言うと吸っていたタバコを天井に向かって吐き出した。

それから1時間程して香がリビングに現れた。高木はまだアトリエに居るようだ。

すまなさそうにしている香の肩を抱いて高木の家を出た。

帰りの車の中二人は無言だった。何か話したかったがどの言葉も思いつかなかった。

家に戻るや香は激しく私を求めてきた。まるで何かに汚された身体を清めようと

するかのよう。それは病的なほど甘美で切ない交わりだった。

> i 3 0 6 4 | 5 1 1 <

h?v=0dM0u9Ncvs

http://www.youtube.com/watch

Camera

Subscriber

Subscriber Library (後書)

Cause We've Ended As Lovers

> i3084—511<

あの日から何度か香は高木の家に行っているようであった。迎えに行く時間には遅れることなく来ていたし、本人も事実を隠そうとしているようであったが、私にはわかっていた。

香が黙っていた理由は明白である。私を失いたくなかったからである。自分のしている行為が酷く私を傷つけるものと判断しての事であろう。実際最初はそんな感情が自分の中に目覚めた事は事実である。しかしその反面美しく妖艶になっていく香を益々愛して

いる自分に気づき、すべてを包み込みたいと思うようになっていた。私は香に提案した。高木の別荘に暫らく滞在してみないかと……

香の会社は旅行代理店である。本来なら夏休みに入るこの時期は有休など以外の外である。

しかし香はその提案を素直に受け入れた。

「7月の24日から1週間休みをとったわ。軽井沢って初めて行くの。どんな所なのかしら」

頻繁に高木に会っている事を、私が知らないと思っている香は冷静さを装っていた。

当日は車で出かける事になっていた。軽井沢には何度か泊まったことがあるが車が無いと結構不便である。別荘は中軽井沢から程近い場所にあり、高木たちは電車で行っている

ようである。高木はほとんど車を運転しないと書いていた。

「ホントに1週間もお邪魔してもいいのかしら？」香がそう言った。私が高木に軽井沢に行く事を伝えてからも香は高木に会っている。高木はそれを

望んでいただろうし、香もそうであるに違いなかった。ただ、私が一緒に居る事は

彼らにとつてどのような作用するのかわからなかったし、私が最も知りたい事だ。

車は上越道から軽井沢に入り、二人が高木の別荘に到着したのは午後2時を廻った

頃だった。

「いらつしゃい。結構掛かったでしょう？」高木が満面の笑みで出迎えてくれた。

池田弘子も後から出てきたが顔色は余りさえなかった。

「お世話になります。本当に良かったんでしょ？押しかけてきて」

「何を言ってるんですか神田さん、来て欲しかったんですよ。お二人に」

そう言いながら別荘の中を案内してくれた。敷地は300坪以上だろうか建物は比較的

新しくヨーロッパピアンスタイルの2階建てである。

中は15畳程のリビングダイニングに6畳のキッチン、ベッドルームが2階と1階に

それぞれ一部屋ずつ。アトリ工用に8畳程の洋間、バスルームはかなり大きい設計になっていた。

「2階のベッドルームを使ってください。」そう言って案内されたのは10畳ほどの部屋だった。セミダブルのベッドが2台置いてあり窓からは鬱蒼とした

森が見えている。

「コーヒーでも入れますから、荷物を置いたらリビングにいらしてください」

そう言つて高木は階段を降りていった。

「弘子さん何だか顔色が良くなかったわね？」香の質問に少し疑問が残った。

先週多分高木の家に行っているはずである。その時は顔色が良かったのだろうか？

それとも家には居なかったのか？いずれにしても弘子の口から直接聞いてみれば

済む事であった。

夕食は庭でバーベキューをするという事だったので、一緒に用意を手伝った。

「それじゃあ、1週間の楽しいひと時に乾杯！」高木が楽しそうにグラスを持ち上げ

長い宴が始まった。結構な量の肉と、ワインを飲んで盛り上がってきた頃、私は高木に

絵の事について聞いてみた。

「高木さん最近絵のほうは描いてるんですか？」高木の反応は意外にも冷静であった。

「おかげさまで、また筆を握る事ができました。一時はもう描くことが出来ないんじゃない

無いかと自分でも不安になっていたんですが……」「一瞬香の身体が強張るのを

感じたが、その時は軽く流しておいた。

香と弘子が後片付けのためにキッチンに入ってゆくのを確認し、真相を確かめる事にした。

「高木さん、昼間香がお宅にお邪魔しているのは知っています。しかし彼女はそれを

私には話そうとしないんです。何かやましい事でもあるのですか？」ストレートに聞いてみた。それでも高木は至って落ち着いた様子で

こう言った。

「私は貴方が気がついていている事は分かってました。改めてお詫びをします。」

だが、やましい事などは何も無いですよ。香さんをモデルに作品を描いている

ただそれだけです」

「それなら何故香は私に隠すのでしょうか？あなたの為？それとも私の為？」

私が一番知りたい部分だった。

「神田さん、私はクォーターに行く時、よく違う女を連れて行つてました。彼女達は

勿論、私の恋人達でした。しかしセックスは一度もしたことはありません。なぜなら

私は不能なんですよ。ご存知ですか？インポテンツという言葉を・・・」

私は一瞬言葉を失った。そして理解できた。なぜ彼が香を描きたくなつたかを・・・

「わかりました、どこまで協力できるか分かりませんが・・・あなたの絵を見届け

たいと思います。それに詫びる必要などまったくありません。むしろあなたに感謝

している位なんですよ。私は今、自分でも経験が無いほどの心で香を愛し始めています。」

ここへ来た理由は勿論それです。あなたのそばに香が居る間のこの感情は、彼女が帰った

後の、あなたの感情だという事が理解できた以上、香を疑う理由はありません」

私がそういい終わる前に、高木は涙を流していた。この男の屈折した愛し方があの作品を

創り上げてきたのだ。その時キッチンから2人が出てくるのが見え

た。

「じゃあ私はシャワーを浴びに行つて来ます。後ほどリビングでカードゲームでも

しましょう」「そう言つと高木は中に入つていった。

Cause We've Ended As Lovers (後書き)

Cause We've Ended As Lovers

Jeff Beck

<http://www.youtube.com/watch?v=THnbh5lTqSY&feature=related>

related

Girl Talk

> i3089 — 511 <

それぞれ風呂に入り、リビングに集まってポーカーゲームをする事になった。

元々ギャンブルは苦手なほうだったがその夜はツイていた。ワインを飲みながら

ゲームを進めてゆくうちに香が先に寝るといって2階へ上がっていった。

長時間のドライブで疲れていたのだろう。この時私は勝負に勝っていたため眠気を

まったく感じなかった。暫らくして高木も限界だと言って1階の寝室に入ってしまった。

リビングで池田弘子と二人きりになった。

「神田さんのおかげで久しぶりに笑いました。高木に聞いたそうですが貴方には

凄く悪いことをしたと後悔しています」

「そうじゃない。君には感謝してるんだ。僕はすべて分かっている上でここに来たんだ。」

それより・・・君は辛くないの？」その言葉には表情を変えずに弘子は言った。

「今彼の心は香さんにあるの。でもそれは作品が出来上がるまで・・・

その後行き場を失った彼の心は必ず私の元へ帰ってくる。そう信じてるの」

その表情には先ほどまでの影は感じられなかった。

その夜は2時間ほど弘子と話していた。彼女の実家は熊本で高校を卒業後就職で

東京に住んでいたらしい。しかし上京して間もない頃、雑誌のイン

タビユーで

スカウトの目にとまりファッション雑誌のモデルになった。就職していた会社は

退社しモデルで食べようと思ったが、思ったほどの収入にはならない。それどころか

自分が身に着けるものが高価なため借金が出来てしまっていた。

これを解消するため夜の店で働き出し、そこに客として来ていた高木と出逢った。

高木は雑誌社に連れられて店に来たらしい。弘子がモデルをやっていた話をする

一緒に来ていた雑誌社に使ってみないかと言ってくれたのだという。それから時々モデルをやりながら夜も働いていたが、高木から絵のモデルになって欲しい

と連絡が入りそのまま一緒に住むようになったのだという。

「私がまだ20歳の頃だったわ。裸になってキャンパスの前でポーズをとっていると

だんだん自分が感じてくるのがわかったわ。回を重ねることにそれが深くなっていくの」

高木に抱いてもらいたかったという。しかし彼が出した答えは他人に抱かせる事だった。

最初は訳がわからず反発していたが、高木が不能でそういった嫉妬心が彼の快樂になる

ということを理解するようになり、高木の前で知らない男に抱かれたのだ。

高木は終わるまでキャンパスの前から動かず、一心不乱に描き続けていたのだという。

私は弘子の話を聴きながら自分の身体が熱くなっていくを感じていた。

部屋に戻ると香はぐっすりと眠っていた。弘子の話しを聞き興奮したせいか目を閉じても

なかなか眠る事ができなかった。仕方なくリビングに戻り缶ビールを飲んでしていると香が起きてきた。

「どうしたの？眠れないの？」そう言いながらソファアの横に座った。

「運転しすぎたせいかな？なかなか寝付けなくて……」

二人は夜の音を聞いていた。暫くして香が口を開いた。

「私ね……黙ってたけど、高木さんの絵のモデルになってるの」「知ってるよ……香が言ってくれるのを待ってたんだ」

少しびっくりしたような顔をして私を見つめながら香は言った。

「そうだったんだ……ごめんなさい。私いけない子ね？」

「ほんとにそう思うのかい？」香りの耳元でささやいた。

香はビクツと身体を硬直させすぐに私に抱きついてきた。

そして私の耳元で小さな声でつぶやいた。

「抱いて……」

二人の間に入っていた小さな亀裂が一瞬にして閉じていった。

G i r l T a l k (後書)

G i r l T a l k

O s c a r P e t e r s o n

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h

? v = i - E Z l q p g j r M & a m p ; f e a t u r e = r e l
a t e d

翌日、四人で旧軽井沢のレストランにランチを食べに行く事にした。香は初めて見る軽井沢の雰囲気に興奮気味で、雑貨店やみやげ物屋などを興味ありげに眺めていた。

高木に案内されたレストランは、メイン通りから一本入った道沿いのフレンチだった。

高級フレンチではなく、肩肘はらずに楽しめる気軽なビストロという感じである。

アミューズに出た砂肝のコンフィやメインの羊肉のローストは結構旨かった。

「それじゃあ食事が終わったら別行動にしましょう。私たちは適当に帰りますから

ゆっくり軽井沢を楽しんでください。夕食は7時頃からいいですか？」

高木がそう言ったので香と一緒に街をぶらつく事にした。

旧軽井沢銀座を歩いていると銀製品のアクセサリーを作ってる店があった。

手作りで色々作ってくれるという事だったので香のブレスレットを注文した。

「ねえ、お揃いで作らない？二人の名前を入れてもらって」

携帯電話を持つようになってから腕時計もはめなかったが、折角なので記念に作る事にした。

夕方には出来るということだったので、観光スポットなどを観て廻った。

香が夕食の手伝いをしたいといったので、ワインやオードブルなど

を買って少し早めに
帰る事にした。途中の店で揃いで部屋着も買ったので戻るとすぐそ
れに着替えた。

「あら、二人ともお揃いで、似合ってるじゃない？・・・あら、ブ
レスレットまで？」

弘子が楽しそうに話しかけてきた。昨日よりずっと明るくなってい
るのを見て少し

安心していった。今夜は弘子お手製の肉料理とパエリアを作るようだ。
香も野菜を切ったり

仲良く手伝っている。案外この二人は気が合うのかもしれない。

高木はアトリエに籠って何か作業をしているらしかった。

少し暇になったので自宅から持ってきたギターを弾いていた。

バンドは辞めたとはいえ趣味としてのギターは時々弾いていた。主
にジャズだが

海辺に遊びに行ったときなどはボサノバを好んで弾いた。この日は
夕食にパエリアが

出るといつていたのでスパニッシュ系のフレーズを演奏していると
弘子がキッチンから

顔を出した。

「知ってますその曲・・・えっとメディテラニアン・サンダン
スでしたっけ？」

「へー、こんな曲知ってるんだ？意外だね。」

「私、少しだけ音楽の世界を目指した事があったの。ボーカルだけ
ど・・・」

「それなら後で歌ってみない？伴奏するよ。ジャンルは何？」

「ボサノバが好きだけど・・・少し恥ずかしいな。ずっと歌って
なかったから」

私は少しほっとしていた。美しい娘だがどこか翳りを感じさせる弘
子がそんな

過去を持っており、青春を謳歌していた頃があったのだ。初めて会

った時から

どこか周りを寄せ付けない雰囲気があり、この軽井沢に来た時もまるで病気にでも

かかっているのでは？と思ったほどだった。しかしこの2日間で顔色はもとより

香と話している間もよく笑い声を耳にするようになっていた。

思えば高木が香に興味を持っているのだから、この別荘の中で浮いた存在に

なりかねなかった。普通の神経なら持たないはずである。

せめて香がモデルになっている間は、音楽によって気を紛らわす事ができれば・・・

私は単純にそう考えていた。それが後で大変な事件になるなど、その時はまったく

予想もしていなかった。

> i 3 1 1 9 — 5 1 1 <

MEDITERRANIAN SUNDANCE (後書き)

MEDITERRANIAN SUNDANCE

ALDIMOLA . PACODE LUCIA

http://www.youtube.com/watch

?v=nm7VIWMEPQ

One Note Samba

> i 3 1 2 3 — 5 1 1 <

サフランの鮮やかな黄色がテーブルに明るく映えている。弘子の得意料理だという

パエリアは本格的なものだった。それに炭火で焼いた豚ロースの焼き色が、更に食欲を

そそった。シャンパンで乾杯した後、料理に舌鼓を打ちながら今日廻った旧軽井沢の

店の話などをしていった。そして話は弘子の音楽活動していた頃の話になった。

高校時代にずっとバンドでボーカルをやっており、上京した際もナンパされた男が

たまたまジャズバンドをやっていた事から話が合い、付き合ってる期間一緒にライブ

などに出演していたという事であった。

「弘子さんそれじゃあ1曲一緒にやってみましょうか」昼に少し打ち合わせをしてあった

ので、譜面には目を通してあった。カラオケセットのマイクを使いステージの準備が整うと

最初はギターのボディを叩いてリズムセクションから入った。それにあわせ高木と香が

手拍子を刻んだ。そしてボサノバのリズムでコードが入り弘子が歌った。

それほど長い曲ではないが見事に歌い切り3人が弘子に拍手を送った。

「すばらしい！久しぶりに弘子の歌を聴いたよ。まさかワンノート・サンバをやるとは

思わなかった。それにしても神田さん、ちょっと上手過ぎじゃない

ですか？」

高木が笑いながら拍手をしていた。

「それじゃあ・・・もう1曲」この夜は合計5曲ほど弘子の歌を披露し夜の宴は終わった。

後片付けが終わった10時頃、高木が少し香を貸してくれないかと言ってきた。

先日まで描いた先を少しだけ描きたいというのだ。私は問題は無いが香はどうかと

たずねた。「よろしくお願いします」香の返事はこうだった。

それほど遅くはさせないと高木は香を連れアトリエに入っていた。その時ほんの少のだが弘子の顔が曇ったのを私は感じ取っていた。リビングで弘子とバーボンを飲みながら私がやっていたバンドの話をしていた。

「神田さん以外の方はプロになられたんですか？ 凄いですね」

「ボクにはさすがにその勇氣は無かったなあ・・・」そんな話を1時間ぐらいいした頃

弘子が、今高木が描いている絵の事について話し出した。こちらに来る前に運送業者に

積み込む荷物のなかに布をかぶせた絵があつたので中を見たらしい。

「それが香さんだとは最初は分からなかったわ。あまりにも妖艶に描いてあつたから」

「それは・・・つまり、ヌードだつてこと？」私が尋ねると首を横に振り言った。

「薄い着物を着ていたわ。白い羽衣のような・・・それが創作なのか本当なのか

分からなかった・・・でも、彼女の表情はエクスタシーを感じた後のものだった」

「僕には分からないんだ。どうして身体に触れることも無くそんな状態になつてしまう

のか・・・君も経験したんだろ？」弘子が思い出すように話し出し

た。

その言葉は淫靡いんびでかつ高尚なものであった。

「初めて彼のモデルになった日、私はヌードを要求されたわ。勿論充分すぎるほどの

報酬が約束されていたから別に平気だった。ところが彼は一向に描こうとしないのよ。

ポーズをとっているのにキャンバスの前で目を閉じてたの。彼は聞いていたのよ

私の息遣いを。そして目を開けると、そのリズムに合わせて筆を滑らせていくの・・・

ゆっくりと」

今度は逆にそのゆっくりとした筆の動きが、自分の何処を描いているのか伝わってくる

のだという。つまり彼の見えない筆が全身を愛撫している・・・そんな感覚に

なっていくのだ。リラックスしたポーズにもかかわらず1時間ほどの間に何度も

気が遠くなるような感覚に襲われていたのである。

その話をする間、弘子はまるで私がそこに居ることを忘れているかのように自らの

胸を驚づかんでいた。

> i 3 1 2 4 — 5 1 1 <

O n e N o t e S a m b a (後書き)

O n e N o t e S a m b a

A s t r u d G i l b e r t o . S t a n G e t z

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c

h ? v " 9 s c 3 X x 6 4 W G E

> i 3 1 3 1 — 5 1 1 <

池田弘子の上気した表情は、明らかに今エクスタシーを感じているのだから事を感じ

取れるものであった。信じられなかった。他人の目の前でこのような状態に陥るなどと

いうことがあるのかと。しかも直接的な身体への刺激ではなく脳内で自己完結するような

自慰行為なのである。

「香も同じような感覚を受けてるとしたら……君は嫉妬したりしないのか？」

私が最も知りたい部分である。あの日以来……初めて香が絵を描いてもらった時から

ずっと嫉妬が心を支配していた。普通それは自分に無いものを他人が所有している時に

感ずるものであるが、高木が香の心を奪っていくのではないかと、いう不安からであった。

だが、香の愛情が益々強くなってゆくのが感じた時、その嫉妬心は私の快樂へ変わって

いった。それは直接香と触れ合う事によって生まれた感情である。弘子が同じように

感ずる事ができるのであろうか？

「嫉妬？そんなもの感じていないわ。むしろ高木と同じ気持ちになっっているの……」

貴方に理解できるかしら？高木が何故彼女を描きたいのか。それは貴方に愛されているから

なのよ。私も同じような感覚を彼と共有しているの「弘子はそういいながら氷の解けた

グラスに唇を近づけた。その時扉を開ける音がして香が部屋に入ってきた。

「おつかれ」私のかけた言葉に小さく微笑んだその顔には、先ほど弘子が見せた表情と同じものが感じられた。

その夜の香はいつに無く激しく私を求めてきた。そのあふれる愛情で気が遠くなるような感覚を体験することができた。

「弘子さんが言ってたが、君も絵を描かれながらエクスタシーを感じているのか？」

「だったら嫌いになる？」耳元でささやく香を今度は私が激しく求めていた。

翌日は昼食の後から香と高木はアトリエに入っていた。天気も良かったので私と弘子は

散歩がてらセゾン現代美術館に足を運ぶ事にした。Ｔシャツにジーンズというラフな

服装にもかかわらず一緒に歩く弘子はまさにモデルであった。すれ違うカップルも

思わず振り返るその均整の取れたスタイルは、一緒に歩くのを躊躇ためらわせるほど

完璧だった。172cmの私には及ばないものの167〜8cmはあるだろうか。

少しウエーブをかけた肩にかかる髪はナチュラルブラウンに染めてあった。

「君はどうして高木と一緒に居るんだい？いくらでも声を掛けられるだろう」

「そうね、でも私に声をかけてくる男は貪欲そうな成金趣味ばかり。愛人にでも

したいんじゃないかしら？」そう言って声を上げて笑った。

「多分君が美しすぎるのが原因だろう。同世代の子が声をかけるの

を躊躇するのは
分かる気がする」

「あら？神田さんに褒めていただけるなんて・・・私には興味が無いのかと思ってたわ」

そう言っていると私の腕に腕を絡めてきた。まあ腕くらいならいいか・・・そんな軽い気持ちだった。

現代美術館は彫刻なども展示されていて結構楽しめた。敷地内には数々の

オブジェが飾られ都会の美術館とは趣が違っていた。どの作品の前に立っても

弘子は様になっていた。まるで始めからそこに居たかのように溶け込んでいる。

彼女を高木が手放さない理由はこの美しさではないかとその時思った。

「神田さん、また歌が歌いたくなってきたの。帰って一緒に遊ばない？」

私も先ほどからオブジェを見ながらハミングをしている弘子の歌を聴きたいと

思っていたところだった。別荘に戻りリビングルームに入ると私は一瞬自分の耳を

疑った。香の喘ぐ声が聞こえたのである。全身から力が抜けると共に冷や汗が噴出して

来るのがわかった。身体はまるで金縛りにあったように硬直し次に何をすべきかも

分からなくなっていた。しかし弘子は違っていた。彼女はその声を聞くやアトリエに

向かって歩き出した。そして鍵のかかかっていない扉を思いっきり開け中に入っていた。

少しの時間・・・私にとっては何時間にも感じたが、弘子がふら

ふらと現れた。

「出て行って。…………あの女を連れて出て行って！」そう言う
うと、その場に

崩れるようにしゃがみ込んだ。その言葉で正気を取り戻し急いでア
トリエに向かった。

そこには全裸の香と下半身をむき出しにした高木が放心状態で立っ
ていた。

Black Magic Woman (後書)

black magic woman

santana

http://www.youtube.com/watch

h?v=ah-yrlenFB0&feature=fv

w

It Was Only Yesterday

> i3140 — 511 <

「いったいどうしたんだ? . . .」何も言わずにうつむいている、香に向かつて質問した。

高木は少しおどおどしながらこちらを見ていた。

「神田さん すまない。まさかこんな事をするなんて」

「それは、無理矢理と言うことか?」私の言葉を香が遮った。

「違うの . . . 私が悪かったの。高木さんを許してあげて」その言葉を聞いて何も言えなくなってしまう。今、自分の中に怒りの感情は無い。あるのは脱力感とその場所に

居たくないという気持ちだけだった。私が出て行こうとすると高木が話を始めた。

「私の香さんへの感情は君も知っていると。彼女を愛してしまつた事によつて

嫉妬心が芽生え私に絵筆を握らせてくれた。私は神田さん、君を尊敬し信頼している . . .

少ししか話してはいないが、私の心の中を見透かされている様な感覚がいつもあった。

だからこそ君が愛する香さんを描きたかつた」

「高木さん、僕もわかつてました。だから何も言わなかつた。だからと言つて今日の

この状況は理解できませんね」

「神田さん、私は彼女を描いてる間ずっと、あなたが彼女と交わつているところを

想像し、嫉妬に燃える手で筆を握っていた。胸が裂けそうになる思いをキャンバスに

ぶつけてきた。香さんは私が不能である事を知っている だ

が今日は違った

もう何十年ぶりに身体が変化したんだ。私は嬉しかった……」
そこまで言うと涙を流してうずくまってしまった。

「晋一郎さんごめんなさい。私が誘ったんです。そうなった彼を受け入れたかった」

二人の話を聞いているうちに、自分の中に不思議な感覚が生まれてきているのがわかった。

嫉妬心とはまた違う性的な感覚であった。

その後、暫らくそこに居たが二人を残してその場を後にした。が、リビングに入ると

大変な光景がそこにあつた。弘子が大量の薬を飲み床に倒れていたのである。

アトリエの2人を呼びつけ、すぐに救急車の手配をさせた。まだ呼吸はあるようだが

意識はまったく無い。脈もかなり弱っているようだった。

高木は弘子に縋り付くように泣きながら謝っていた。それが私には何故か滑稽に見えていた。

弘子はすぐに軽井沢病院に搬送された。睡眠導入剤を50錠ほど飲んでいたが

命に別状は無いとの事だった。一応念のため2、3日入院して様子を見るといい。

高木が病室に付いていると言っている。香と私は別荘に戻って着替えなどを

持ってくる、と言って病院を出た。沈黙が続いていた。

高木には7時ごろ行くと言ってあったので、まだ2時間近くある。リビングに座って何を話せばいいのか考えていた。長い沈黙の後最初に口を開いたのは

香のほうだった。

「私って、バカな女でしょ？貴方の事が好きなのに他の男に抱かれ

るなんて……」

涙が白い太ももに落ち、その弾力のある肌を伝いながらソファーに消えていった。

「自分でも不思議なんだが、あの状況を見ても君への怒りや憎しみは、まったく

言っていないほど無いんだ。勿論、君を侮辱する言葉はいくらでも思いつきそうだけど

君が僕を愛しているのがわかるから……君を失いたくないんだ」

私がそう言つと香は泣きながら抱きついてきた。

「ごめんなさい……」

私はこの時自分の中に、ある奇妙な感情がある事に気づいた。それは、さっきまで高木に

抱かれていた香の身体が、どんな風に高木を受け入れ喘いでいたのか。

それを香の口から聞きたいという。自分でも理解できない感情だった。

それを口にするには無かったが香を抱きながら感じ取っていた。

It Was Only Yesterday (後書き)

It Was Only Yesterday

Larry Carlton & Steve L
ukather

<http://www.youtube.com/watch>

h?v=2kXNNXSWY8

> i3141—511 <

病院に着替えなどを持って行くと言子を目を覚ましていた。

「弘子さんごめんなさい……」香が泣きながらベッドに近づいた。

「私こそどうかしていたの……何であんなことしたのか分からない……」

弘子もまた涙を流していた。高木はずっと弘子の手を握り締め、彼女の頭を撫でていた。

高木の創作意欲を取り戻してやりたい、そう思った弘子の行動が結果的に今回の事態の

発端であった。彼女は彼女なりに、自分の中で納得していたはずであった。しかし

人間の感情というものは、そんな簡単に支配できるものではなかった。彼女のとつた行為は

自分への報復だったに違いなかった。高木が弘子を愛しているのは痛いほど分かる。

この二人は今後もやっていけるだろう。私はその時そう思った。それに引き換え私たち二人はどうだ？こんな不安定な状態でこの先

もやって行けるのか？

香を愛する気持ちに変わりは無い。香もそうだろう。だが、一度味わってしまった甘美な

世界を放棄できるのか？それよりも益々エスカレートして行きはしないだろうか？

エスカレートして行ったその先にあるものは……

病院を9時ごろ出た二人は中軽井沢にあるレストランで遅い夕食を摂る事にした。

「明日はここに泊まってあさつての朝帰ろう。彼の作品は結局完成させられなかったね？」

私がそう言うと、香は首を振りながら言った。

「結局、絵なんてどっちでも良かったのかもしれない。私は自分から進んで高木さんの

モデルになる事によって、快樂を得たかっただけのよ様な気がする」「何よりも・・・そう望んだのは僕なんだ。こうなる事はきつと分かっていたんだ

それでも美しく淫靡になってゆく香を見ていたかった。それを望んでいた・・・」

「私たち、これからどうなるのかしら？」香が言おうとする事は理解できた。

「僕に言えるのは、どんな事が起こっても君を放さないという事だよ・・・」

その日の夜は結局一睡もせず二人は愛し合った。

昼の出来事を思い出しては香を抱き、果ててはまた思い出す。

二人とも現実の世界には存在していないような感覚であった。

翌日は2時ごろまでベッドでまどろんでいて、遅い昼食を摂ったのは3時過ぎであった。

それから病院に見舞いに行き、明日の朝帰ることを告げた。

高木も絵への執着は無いようであった。それよりも目の前に居る弘子の事が

よほど大切だったのだろう。

自宅に戻ってからの二人の生活は一見以前となら変わり無いように見えた。

私自身香に対して高木との事を聞いたことも無ければ、香も何も話さなかった。

9月に入り香の職場も少し慌ただしさが無くなり、休日も取れるよ

うになつてきていた。

そんな日は2人で近場の温泉に出かけたり、ショッピングをしたりしていた。

ジャズクラブにも何度か行ったが、高木らとは一度も会うことは無かった。

10月に入つて二度目にクオータに行ったのはお気に入りのバンド funky-dog の出演日

だった。その日もメンバーが私たちのテーブルで、演奏が終わつてからも話していた。

「ところでさー、カンちゃん知ってる? . . . ほら、画家の高木さん。亡くなつた

らしいよ . . . 」ベースのマサさんの言葉に二人は絶句した。

「それがさ、僕の友人に画商がいてね。そいつからの情報なんだけど . . . どうも

高木さん、自殺したんじゃないかって。そういえば最近見ないから変だとは思つたんだよね」

香が震えているのが伝わってきた。私自身もその後どうやって高木の家に着いたのか

記憶が無かった。高木の家は真つ暗だった。人の居る気配は無い。

「こつちには戻つてこなかったのか? 何だつてそんなこと! 」

「私のせいだわ . . . 私が悪いんだ . . . 」香が崩れ落ちた。

暫らくして門燈の明かりが燈り中から弘子が出てきた。

顔はやつれ、髪の毛も乱れており足取りはフラフラとしていた。

「弘子さん、何があつたの? 」香の言葉にやっと気づいたように言つた。

「よく来て下さいました。高木もきつと喜ぶと思います どうぞ入つて」

家の中に入ると空気が重かった。ずっと窓を開けていないためか湿気を帯びた匂いが

した。そこには高木の遺影と蝋燭があるだけだった。部屋の照明を

つけるテーブルや

棚は、ほこりが溜まっていた。

「あの人・・・あの日からずっと優しくかったわ。毎日私とずっと一緒に・・・」

あれから、絵は一度も描かなかったけど、私はすごく幸せだった。でもそれはきつと

こうする事を決めていたから。前から言っていたのよ。絵が描けないくらいなら

死んだほうがましだって・・・だからわたし・・・香さんと呼んだのに」

そう言いながらしゃくり上げる様に泣いていた。もう涙は枯れ果てているのか

頬を僅かに濡らすだけであった。高木は9月に入ってまたノイローゼ気味に

なっていたらしい。そして9月24日早朝にアトリエで首を吊ったのである。

弘子が発見したのはその日の昼前だったらしい。遺書は見当たらなかったという。

弘子とは籍が入っていないため、近く身内の者が財産など、弁護士を頼んで分けるらしい。

ただ、弘子は一切の権利を放棄していた。高木の家を訪れて以来、私は自分の身体にある変化が起こっている

ことを感じていた。それは高木と同じ症状であった。一度病院にも出向いたが精神的な

シヨックによるものであるから、時間をかけて治しましょうという事だった。

それでも香との仲は何も変わらず。生活も幸せな日々が続いていた。そんなある日郵便受けに目を疑うような封筒が入っているのを発見した。

それは高木からの手紙であった・・・

> i
3
1
4
4
2
—
5
1
1
<

THE MESSIAH WILL COME AGAIN (後書き)

THE MESSIAH WILL COME AGAIN (メシ
アが再び)

ROY BUCHANAN

http://www.youtube.com/watch
h?v=deeBQZ8AkIc&feature
lated

最愛のギタリストロイ・ブキャナンに捧ぐ

「これを見てごらん」私が封筒を渡すと香は小さく悲鳴をあげた。「あいつ遺書は残さなかったと聞いていたが、まさか・・・ここに送ってくるなんて・・・」

それ以上言葉が出なかった。まだ幾日もたっていないのにもう懐かしさが込み上げてきた。

「なんて書いてあるのかしら・・・」充血させた目で香が言った。

「中に入って読んでみよう・・・」私たちは急いで部屋に入り白い封筒を丁寧に開けた。

便箋が2枚と小さな鍵がセロテープで留めてあった。

便箋は小さな文字でびっしりと書かれてあった。

「前略

神田君・香さん、きつとびっくりしてると思う。多分風のうわさで私が選択した道を

知った君たちは、弘子に会ってくれているのだろうね。突然の事だったから多分

驚かせてしまったと思う。改めてお詫びをしたいが、それは叶わぬことだ。

私の選んだ道について、君たちはきつと叱責すると思う。それは重々分かっていての事だ。

もともと私が絵の道に進んだのは父の影響で、大学を卒業後父親の奨めでヨーロッパを

一人で旅をしていた。そこで接した絵画や建物、それらが私に芸術を教えてくれた。

一生懸命絵を学び25歳の頃には作品も評価され私は希望に満ち溢れていた。

素敵な恋人も出来、結婚まで考えていたし、作品もどんどん描くことが出来た。

だがある忌まわしい事件が何もかも私から奪っていった。私の乗った車に大型トラックが突っ込んできたのだ。私と恋人は車外に放り出され恋人は即死、私も瀕死の重症を負った。その時私の恋人は妊娠していた。4ヶ月だった。私の傷は完治したが脊髄に受けたダメージと精神的ショックから、二度と女性と交わる事のできない身体になっってしまった。これは君に話したとおりだ。その後の私の生活は荒れたものだった

それがあるとき自分のコンプレックスを解消する方法を見つける事ができた。

それがあの方法だったのだ。しかしそれも長くは続かなかった。結局人を愛する事が出来なかったのかもしれない。ただその中で唯一愛する事ができたのは君達だった。

私のことを理解してくれる神田君を愛している人物、それが香さんだった。

香さんをモデルにした時、神田君の心が手に取るようにわかった。そう思うと益々香さんを独占したい気持ちでいっぱいになった。それが嫉妬である事は分かっていった。それでもかまわなかった。あの日、自分が以前の身体に戻れた一瞬が私の人生のすべてだった。私はあの喜びを忘れない。香さんには感謝の気持ちで一杯で、お礼の言葉も見つからない。神田君もあのような事があってもまだ私を理解してくれた。私は幸せ者だ。

最近どうも体の調子がよくない。精神的なものだとずっと思っていた。

ノイローゼなのだ。しかしそれは間違いだった。私は癌を患っていたのだ。

末期であった。医者はすぐ入院にせよと言っていた。しかし私にはやるべき仕事が残っていた。あの絵だ・・・あれを完成させなければ死んでも死にきれない。

そう思い、入院は断った。その日以来、弘子が寝てから毎晩描き続けた。

さすがに可愛そうでそんな所はあいつには見せられない。嫉妬すると思った。

なんとか死ぬ前に完成させる事ができたよ。作品は中区のアーティストに預けてある。

預かり書は貸金庫に保管してある。同封した鍵がそれだ。きつと気に入ってもらえると思う。

香さん君は優しい子だ。きつと幸せになって下さい。

神田君 バーボンのストレートは身体によくない香さんのためにも少し控えるよ。

敬具

二人の永遠の友 高

木隆一

書面にはこう書かれていた。

最初香は口に出して読んでいたが、途中から涙と鼻水で読むことが出来なり代わりに私が

読んでいた。読み終わって高木が何故自殺したのか分かったような

気がした。

すべてを成し遂げた充実感があったのでは無いだろうか？

その日のうちに貸金庫に出向き預かり書を持ってアートプラザに出かけた。

絵は嚴重に木箱に入れられ、箱には「愛する人」と書いてあった。家に戻り絵を見た。

二人は暫らく何も話す事ができなかった。

それはルノアールを思わせるタッチで、今までの高木の作品とはまったく違うもので

あった。

その絵は今にも動きそうなほど見事なもので、世に出せば彼の間違いなく代表作

になるはずである。しかし、それは彼も私たちも望んではいなかった。

「この絵を見るたび高木隆一を思い出す。それが彼の望みだったんだ」

絵の一番下に小さな文字があるのに香が気づいた。

親愛なる友・神田晋一郎 香夫妻に捧ぐ

そう書いてあった。

> i 3 1 4 4 — 5 1 1 <

Old folks (後書き)

Old folks

Oscar Peterson

http://www.youtube.com/wat
ch?v=6zXWRYaE3FW

Round Midnight

> i 3 1 5 1 — 5 1 1 <

高木の手紙が届いてから私の病気は嘘のように治っていた。それは、以前のような

病的な興奮ではなくごく自然なものだった。二人にとって穏やかな日々が何日も

過ぎていった。香はずっと私の家に居り、自分のマンションには郵便と掃除をしに

月に4〜5回行くだけであった。私の中には、このまま香と結婚してもいいのではないか

という気持ちがあった。私は再婚であるし、香も両親は死別しており、親戚といつても

ほとんど交流は無いらしい。裕子には私から事情を説明し友人達で式を挙げるのも

良いのではないか？そんな風に考えていた。

そんなある日、香が体調の不調を訴えた。食欲が無く胃の具合が悪いという。

すぐ医者に診せることを勧め、翌日病院へ連れて行った。そこで初めて香の妊娠を

知った。二人は喜び合えずぐに籍を入れようという話しになった。

それなら、友人達を集めジャズ・クラブ・クォーターで簡単な式を挙げてはどうか？

そんな話しに発展していった。兎に角祝福したい気持ちでいっぱいだった。

クリスマスを直前にしたある日、香が変な事を言った。

「晋一郎さんはどうして子供を作らなかったの？裕子さん欲しがらなかつた？」

「そんな事言つたってお互い忙しかったし、全然そんな雰囲気じゃ

無かったよ」

「じゃあ結婚してから……しなかったの？」そう言って少し顔を赤らめた。

そう言われてみれば、新婚当初は勿論毎日のように夫婦の関係はあった。

仕事が終わると早く家に帰りたかった。住んでいたコーポラスの階段を段飛ばしで

登った程であった。それに避妊は一度もしたことがなかった。

香にそう言われて何故子供が出来なかったのか、少し疑問が残った。

「まあ、こればかりは神様の授かりものだから……結局裕子とは

縁があるようで無かったのかな？」そんな会話をしていた。

その日眠りかけた頃、私の脳裏にふと嫌な考えが浮かんだ。

……まさか、高木の子を妊娠したのでは？……

自分の中では小さな疑問だったが、過去に付き合った女性の中でもそうだった事が

無かったのは偶然なのか？ひょっとしたら自分は子供を作る事が出来なかったのでは？

そんなことを考えるようになってしまっていた。

翌週、香には話さず病院で検査をしてもらった。やはり自分の中で小さな

疑問があると、正直に喜べないかもしれない。そのためには検査を受けスツキリ

しておきたかった。

診断の結果は無精子症であった。

いつからそうだったのかは分からないが、多分子供の頃のおたふく風邪等により

そうなった可能性があるとの事であった。

元々子供が出来ない体質だったのだ。私はこの事を香りに話すべきかどうか悩んだ。

香の妊娠は嬉しいし、それが自分の子供ではなかったとしても何も変わりはない、と思っていた。元々香に子供が居たとしても愛しただろうし、結婚したいと

思っただろう。今香にその事を話し、気が動転したりすればきっと身体に障るだろう。

ただ、不安もあつた。子供の血液型である。病院によっては出産時に教えてくれる

ところがあるらしい。その時まで知らないというのはどうなのか？それに将来何かの機会に、子供が知ってしまったら……色んな考えが頭の中をよぎって行った。

私は悩んだ。悩みぬいた。そして出した答えは、香に真実を告げ支えてやる事だつた。

その夜、安定期に入った香と、愛し合った後のまどろんだ時間に打ち明ける事にした。

「香りの事を誰よりも愛してる……わかるね？」

「どうしたの？急に……私も貴方の事愛してるわ」

「生まれてくる子供は二人の宝物だ。僕は一生、二人を守っていく決心をしてるんだ」

香は黙って聞いていた。腕の中で静かに呼吸をしている香のおでこに口づけをし

言葉を続けた。

「今週病院である検査をしてもらつたんだ……」

「え？……まさかどこか悪いなんて言わないよね？」香が不安げに私の顔を見た。

私がか重い病気にかかっているのではないか？そう心配する眼差しであつた。

「結果は無精子症だつた……」

「無精子症？……」香は理解できていないようだった。少しの間が経つた頃、

「もしかして……」私は頷き香を抱きしめた。香の身体が震えるのが分かった。

私は香を思いつきり抱きしめ、こう言った。

「何も変わらない。二人に愛され生まれてくる子供だ。何も関係ない……」

香は震えながらじっとしていた。涙を流しているのが伝わってくる。香の気持ちが

落ち着くまでずっとこうしていよう……そう思った瞬間香が激しく暴れだした。

「どうしたんだ香？やめるんだ」

「嫌！放して。放して！」そう言つとベッドから裸のままリビングへ走ってゆき

大声で泣き喚いた。私は大変な間違いをしてしまったのか？

自分でもどうする事もできず、ただ香を見つめていた。

その日の夜、香はとうとう一睡もしなかった。服も着ないでソファで丸くなっている

だけだった。服を持っていっても、毛布をかけようとしても払いのけるばかりで

手が付けられなかった。

翌日香は仕事を休んだ。あれから一言も口をきいてくれなかった。

「香、ご飯作ったよ……一緒に食べよう」

「……」無言である。きつと時間が解決してくれる。

それまでゆっくり時間をかけるより、他に方法は無いと思っていた。香の口が動いているのが分かった。

「貴方の子供が欲しかったの。貴方の赤ちゃんだと思ったの……」

貴方が好きだから子供が欲しかったの！なのに……子供なんて要らない！」

そついうと自分の腹を両方の拳で殴りだした。

私はあわてて走りより、香の行動を制した。それでも尚香りは脚をバタつかせ暴れた。

私は香を抱きしめる以外出来る事が思いつかなかった。

その日の夕方になって、やっと香は落ち着いてきた。

私を作ったりゾットをほんの少しだけ口にしてくれた。私は後悔していた。

やはりこの時期に言うべきでは無かったのかも知れない。

自分の中で何度もシミュレーションし香が傷つかないように考えて行った事は

すべて裏目に出ていた。その翌日、香は仕事へ出かけた。私も気分転換のためにも

家に二人で居るよりは良いのではないかと思い、職場へ送った。

夕方、いつもの時間になっても香は来なかった。1時間ほどそこで待っていたが

現れないので、自宅で待つ事にした。携帯電話の電源は入れていないようである。

夜11時を廻っても香は戻ってこなかった。友達のところへ泊まっているのか？

それともホテルだろうか？いずれにせよ明日職場に電話をしてみれば香はきつと居る

そう思っていた。しかし、翌日は仕事を休んでいた。無断欠勤のようである。

私は少し不安になってきた。まさか変な事を・・・

その日は眠れなかった。その後3日が過ぎても香から連絡が無かった。

私は不安になり搜索願を警察に届けた。警察の対応は事務的であり、心配そうに

話してはくれるものの、他人の夫婦間のことなどで動くような素振りには無いようである。

それからの数週間、私には毎日が後悔の日々だった。そして封筒が

1
通届いた。
・
・
・
・
・
・
・
差出人は香であった。

R o u n d M i d n i g h t (後書)

R o u n d M i d n i g h t

M i l e s D a v i s

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t
c h ? v = v w t N 7 W u O E o A

手紙の消印は金沢中央であった。
便箋には少ない文字が綴られていた。

晋一郎さん、ごめんなさい。何も言わずに家を出たこと許して下さい。
さい。

私の中では想像もしていなかった事実を知り、自分のした事への後悔と

晋一郎さんへの詫びる気持ちで、そこに帰ることができませんでした。

そして一度は死を決意し福井県へ行きました。でも、お腹の子供が許してくれませんでした。悲しいですね、自分の意思とは関係なく子供は元気に育ってるんですもの。

あなたのことを愛しています。でも今、貴方と一緒に居る事は出来ない。

子供はひとりで育てるつもりです。貴方その気になれば私を見つける事は

簡単でしょうか？でもお願いだから捜さないでください。

バカな女だったと忘れて下さい。

子供が大きくなった頃、きっと会えると思います。

それまでどうか捜さないでください。

上田香

全身から力が抜けてゆくを感じていた。

まず香が生きていてくれた事への感謝と、捜さないで欲しいと書い

た香の思い。

自分がどう行動すればよいのか、まったく分からなかった。熱っぽい身体をやっとの思いでソファーまで運んだ。

疲れきっていた……

私は夢を見ていた。

香が断崖にいた。私は叫んでいた。しかし声は香には

届いていなかった。近づこうとしても身体は動かなかった……2時間ぐらい眠っていたであろうか、寒気を感じて目が覚めた。

体温を測ってみると39度程あった。ベッドに横になりながらその広さを感じていた。

香と一緒に住む前はそんなことを感じた事は無かったが、こうやって一人でいると

無駄に広く寒々しい。

翌日も熱はひいていなかった。簡単な食事を済ませソファに座ってテレビをつけると

相変わらず芸能人の大麻所持を報道していた。そのままボーっと画面を眺めていた。

その時携帯電話が鳴る音がした。池田弘子だった。電話に出ると今、近くまで来ているので

よりたいと言うことだった。

10分ほどしてエントランスでチャイムが鳴った。モニターには弘子が映っていた。

オートロックを解除すると暫らくして玄関のチャイムが鳴った。

「やあ、いらっしやい。どうぞ入って……」そう言ってリビングに案内しようとして

私は床に倒れてしまった。記憶はそこまでである。

何時間経ったのだろうか、私は寝室のベッドで目が覚めた。頭には氷枕が敷いてあった。

「神田さん、凄い熱じゃないの……香さんはどうしたの？仕事？……こんな病人

を一人にして行くなんて……」

「すいませんでした。昨日からちよつと調子悪くて……香は旅行に行つてるんですよ」

「そうだったの、リビングの高木が描いた絵見たわ……きれいなちよつとヤキモチ

焼けちゃうわ。私ねフランスに留学しようと思つたの。それで今日はお別れに来たのよ。

高木が少しお金を残してきてくれたの。随分後になって手紙が届いたわ……

カードと暗証番号だけ。メッセージは無しよ。どう思う？神田さん
そう言つて笑い出した。確かに高木らしい。しかし、いい所があると感心していた。

「いくら入つてつたの？下世話だけど気になつてね」私がそう言つと、弘子は指を

3本立てた。「300万？」私が言つと首を横に振つた。

「3000万入つていたわ」少し驚いた。高木はちゃんと弘子の将来も考えて

いたのだつた。

「ねえ、ご飯食べたの？作つたげる……」そう言つと弘子は寢室を出て行つた。

私は高木のことを考えていた。彼は癌に侵されていた。そして最後の瞬間に

愛する人に巡り合い、自分の子孫を残した。香はその子供を自分一人
人で育てると言つた。

それは私の子としてではなく高木の子供として育てる、という事なの
だろうか？

高木の絵を私は理解したつもりでいた。しかし本当にそうだったの
か？

最後に描いた香の肖像画からはあふれるほどの優しさ、愛が感じ
られた。

それは高木が言うような嫉妬などではなかった。

そう考えていると涙があふれてきた。とめどなく流れる涙を止めることが出来なかった。

「お待ちどうさま・・・」そう言って弘子が入ってきた。

「どうしたの？どこか痛いの？」泣いていたため目が充血していたのである。

「泣いてた・・・の？香さんと何かあったんじゃない？」そう言って

サイドテーブルに食事を置いてくれた。中華風のおかゆだった。

「ありがとうございます。ご馳走になるよ」今日も食事らしい食事をしていなかったせいか

少し腹が減っていた。弘子の粥は美味かった。

「神田さん、香と喧嘩したんでしょ。なんとなく分かるわ。それで出て行っちゃったんだ」

何も知らずに弘子は楽しそうに笑った。

「さつきね、料理していて気がついたの。香さん居ないんじゃないかって・・・」

「香は金沢に居るらしい・・・少し時間が必要なんだ。僕たちには・・・」

「らしい・・・って、居場所もわかんないって事？どうして・・・あんなに仲良かった

のに・・・」私はあえて説明はしなかった。二人の間に沈黙だけが続いた。

弘子はもう遅いから帰ると言って部屋を出た。私が玄関まで送っていくと不意に

キスをしてきた。振りほどく気力もなかった。

「元気出してよ。きつと帰ってくるわ。そうでなかったら私が神田さんの事もらっちゃう」

そう言って舌を出しドアを開け出て行った。

少し冷たい空気が入ってきた・・・

香への想いからまた涙が出てきた。

G Y M n o p p ? : d i e N o . 1 (後書き)

G Y M n o p p ? d i e N o . 1

E r i k S a t i e

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c

h ? v = S - X M 7 s 9 e G X U

いよいよクライマックスへ

When You Wish Upon A Star

> i3158 — 511 <

2月に入った雪の日。私は空港に居た。日本に居ても香の事ばかり考えしまい、何も

手につかない・・・暫らく以前住んでいたベトナムに行こうと思っていた。

期間は10日ほどだが、気晴らしにはなるだろう。

14時15分発のCX便を待っていると携帯電話が鳴った。池田弘子からである。

「もしもし、神田さん？どこ行ってるの？貴方の家の玄関に居るのよ開けてよ！」

「今、家に居ないんだ・・・セントレアに居る」

「セントレア？なんで飛行場なの・・・すぐに会いたいのよ！」

「無理だよ・・・14時15分の香港行きがもう来るんだ・・・用件は何だったの？」

「バカね！香さんの事に決まってるじゃない！私、金沢に行ってきたのよ。香さんに

会ってきたの。ねえ・・・戻ってきて。伝えたい事がたくさんあるのよ」

「香に会ったって・・・」私は身体が熱くなるのを感じていた。

池田弘子は何の手がかりも無しに、香を探し出したというのか？いったいどうやって・・・

「わかった。これからすぐに戻るよ・・・4時には着くと思う」電話を切り私は焦る

気持ちを抑えながら電車に乗った。

家に戻って暫らくすると弘子がやってきた。

「間一髪だったわね。後30分電話が遅かったら・・・まあ、いいわそこに座って頂戴」

順番に話すから」弘子はコーラを1杯飲み干してから喋りだした。

「最初はどうかやって捜していいのか分からないまま、金沢に行ったの。まあ、旅行の気分

だったんだけど・・・それで市役所に行ったらいいのか、警察に行ったらいいのか

迷っていたの。そんな事思いながら歩いていたら、お腹が空いちやつて・・・

駅前のレストランに入ったの。運命って信じなかったけど、こういう事ってあるのね。

香ちゃんが働いていたのよ。もう、お互いびっくりして暫らく固まっていたわ」

そのあと店が終わるのを待って香と落ち合い、話をしたらしかった。そして今までの

経緯を聞いたらしい。

「まさか妊娠してたなんて・・・びっくりしたわよ。私にできなかった事を香ちゃんが

出来たなんて・・・かなり妬いたわ。でも、そんな事言っただってもう高木は居ないんだし

私はまだ若いんだから・・・これから絶対いい男見つけて幸せになるって決めてたから」

彼女はそこまで言うのと深くため息をついた。そして更に続けた・・・

「彼女、独りで生んで育てるなんて言うじゃない。そんなこと無理だつて言っただつたわ

それでも、頑固なのよ。貴方に申し訳ないって。そればかり・・・だから貴方が病気に

なつて死にそうだつて言っただつたのよ。あの時はまんざら嘘でもなかったし・・・」

それからも猛烈な勢いで話し続けた・・・

「それで・・・ハイ。これが住所。神田さんに渡してもいい？つて聞いたら頷いたわ。

携帯電話は解約して持っていないそうよ。どう？私のこと見直した？
フランス行き延ばして捜したんだからね。・・・結局直ぐに見つか
ちゃったけど・・・」

そう言つて笑つた。私は弘子を抱きしめたくなるほど感激した。
私はその日のうちに金沢に向かうことにした。

18時22分のしらすぎに間に合った。

途中米原からは雪が舞っていて、金沢に入ると少しだけ積もり街を
美しく輝かせていた。

駅から出て香が働いているというレストランを捜す。

それは雑居ビルの2階にあった。

少し古びた看板が目に入り階段を登ると、自分でもはっきりと聞き
取れるほど

鼓動が激しく高鳴っていた。

ガラス製のドアを開ける。まだこの時間なら店に居るはずだ。

髪の毛を茶色く染めたウエーターが席に案内してくれた。

私は黙つて周りを見渡した。居た、香だ。銀色のお盆に水の入った
コップを乗せ

こちらの席に向かつてくる・・・

「いらつしゃいませ。ご注文は・・・！！？」

私に気づいた香がその場に固まった。

お腹は少し目立つくらい膨らんでいる。

私は何も言わず立ち上がり、香を抱きしめた。

香は震えていた。

「会いたかった・・・」

私の言葉に香は泣きながら言った・・・

「私も・・・」

周りの客達のざわめきが聞こえた。

さっきの茶髪のウエイターと一瞬目が合う。

彼は親指を立てウインクをしていた。

ふと我に振り返り耳を澄ますと、聴き覚えのある音楽が流れていた。

・・星に願いを・・

私は香のおでこにそつとキスをした。

：

> i 3 1 5 9 | 5 1 1 <

When You Wish Upon A Star (後書き)

When You Wish Upon A Star

Billy Joel

<http://www.youtube.com/watch>

[h?v=Y4GlcUP4RRw&feature=vw](http://www.youtube.com/watch?v=Y4GlcUP4RRw&feature=vw)

これで、このお話はおしまいです。

ご協力いただきましたねとらじD J ぢる様リスナーの皆様
に感謝し 後書きとさせていただきます。

皆様に素敵な出会いがありますように……

ps 最近放送が減ったようですが……猫 印は不滅です。

山田サンタ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878i/>

Distant eyes

2010年10月9日07時08分発行